

プロローグ

グラスの中で氷山が溶ける。

「遊輔の遊は遊び人からきてるって噂ホント？」

「名前の由来なんか知らねえよ。お代わり」

ウイスキーを干してカウンターに突っ伏すのは、三十路がらみの眼鏡の男。

三白眼の悪人顔で、職業を問われたら十人中八人がインテリヤクザと答へ、残り二人が落ち目のホストと答へる。

だらしなく背広を着崩し、ネクタイを緩めた遊輔を見下ろし、ゴツイオカマのママはあきれ顔で嘆く。

「これ以上飲んだら歩いて帰れないでしょ」

「金落としてんだぞこっちは」

「そんなこと言うとお持ち帰りするから」

悪戯つぼく脅せば、遊輔は「好きにしてくれ」とくだを巻く。

すっかり酔い潰れた遊輔の隣、生真面目なサラリーマンが心配する。

「大丈夫でしょうか」

「ダメかもね」

「カタギには見えませんが……仕事は何を」

「記者よ。週刊リアルで書いてる」

コップを磨きながらママが呟く。

「電車の吊り広告でよく見るあの？」

「芸能人の誰それが不倫したとか覚せい剤やってるとか、しょうもないゴシップネタ専門の週刊誌」
ママの饒舌な説明に仮死状態の遊輔が突如起き上がり、凶悪な酔眼で二人を睨み付ける。

「個人情報守秘義務どうなってんだ、他の客にべらべら漏らすんじゃないか」

「記者なんかやってるくせにプライバシーべらべらまくほうが悪いんでしょ。ねえ薫くん」

猫なで声を出すママの視線の先、バーテンダーの制服も初々しい好青年が曖昧に笑って受け流す。

「ツイッターだのインスタだの色々おつかないご時世ですからね。口は災いのもと、個人情報は秘匿するにこしたことはないかと」

「誰？」

遊輔が瞬きする。ママが頬に手をあて盛大なため息を吐く。

「アンタががぶ飲みしてる水割りを作ってた子よ、新しく入ったバーテンの富樫薫くんとがしかわる。ピッチピチのハタチよ」

「女受け狙ってイケメン入れたの」

「可愛い娘増えるのは歓迎でしょ、摘まみ食いしてるものね。薫くんも気を付けて、この人死ぬほど手癖が悪いから」

「男に興味ねえよ。お前こそ気を付けろよ、好みの若いものとなるとママがほつとかねえ、いてっ」
頭をはたかれて撃沈。

「ほんつと最低、記者ならコンプライアンスに敏感になりなさいよ。次にオカマ蔑視発言したら出禁にするから」

「事実じゃん……忘れてないぜ若い頃ケツ揉まれたの」

「スクープの裏話とか聞かせてくれませんか」

サラリーマンが興味津々身を乗り出す。

遊輔はしゃつくりし、「話すようなネタねえよ」と無愛想に返す。

ママが助け舟をだす。

「アレは？ 何年か前に蓮見尊はすみたけの少女売春すっぱぬいたでしょ」

「蓮見って『モーニングスカイ』に出てた俳優の？」

「俺も知ってます」

サラリーマンと薫が驚く。

ママが調子にのる。

「私もファンだったのよくなのに未成年と援交とかゲンメツ。今はパパ活っていうんだっけ？ まあどつちでもいいけど、愛妻家の二枚目で売ってたのに好感度大暴落よ」

「確か自殺……」

グラスが床で割れ砕ける。

「手が滑つちまった、悪い」

「やっぱり飲みすぎよ」

「箸とちりとり持ってきます」

「お願いね」

薫が奥へ引つ込み、ママが眉八の字で諭す。

「ホント今夜は帰りなさい。足元ふらふらじゃない」

「……すびー」

「お勘定前に寝オチしないでちょうだい、またツケる気!？」

「やば、こんな時間？ 僕も失礼します」

グラスの残りを干したサラリーマンが、そそくさと帰り支度を始める。

「ありがとうございました、またお越しくささい」

ドアベルを鳴らして出ていくサラリーマンの背中に、科を作つて愛想を投げかけたあと、困り果てて遊輔を見下ろす。

「起きて！ 起きてば！」

荒つぽく肩を揺すり耳元で大声を出す、遊輔は軀をかいて熟睡している。

「タクシーだけ呼んで放り出しておこうかしら」

「俺がやっておきます」

「えっ、いいの？」

「後は任せてください。遊輔さんのフォローも心配なさらず」

「ならお言葉に甘えちやおうかしら」

「お疲れ様です」

ブランド物のハンドバックを肩に掛けたママを丁寧な一礼で送り出し、遊輔の肩を揺さぶる。

「大丈夫ですか遊輔さん」

呼吸は深く静かに安定している。口元に耳を近付け、規則正しい寝息を確認した後、満足げにほくそ笑む。

「よかった。葉がきいてる」
当分起きないはずだ。その間に準備を進める。

『ブラック企業のパワハラネタねエ。悪くないが地味じゃないか、自殺したのは四十代の中年だろ』

『地味って……遺族の心情はどうなるんですか、奥さんと小学生の息子がいるんですよ』

『遺書は？ 録音テープは？ きょうび証拠がなけりや組織は動かんよ』

『同僚や部下の証言を集めました。家族からも悩んでる裏付けがとれましたし、もう少し粘れば内部告発だって』

『華がないんだよな』

『華……？』

『これが新卒の若くて可愛い女の子なら可哀想にねって同情引けるが、四十路のくたびれたリーマンが会社の屋上から飛んだって、あーまたかで済まされちゃうよ。SNSやってたわけでもねーんだろ』

『だけど』

『お前さ、年間何十万人がパワハラだの過労だので死んでると思ってる？ メディアに構ってもらえるのは幸運な一握り、あとは知らんぷりそちのけ。ネタにも鮮度がある、キャッチャーな悲劇じゃなきゃ誰も食いつかねエ』

上司の言い分に、遊輔は言葉を返せなかった。

遊輔の取材の結果、死んだ会社員はサービス残業を何百時間も課されて鬱病になった事実が判明した。しかしタイムカードは捏造されており、パワハラが行われた物的証拠は掴めずじまい。

周囲の証言だけでは弱いと見なされ、このネタは没になった。

『ちよつと待つてください、なんで取材がダメなんですか』

『上から苦情がきたんだよ、これ以上嗅ぎ回るなって』

『有名大のサークルコンパで暴行されたんですよ？ 被害者の子は大学やめちまったのに、犯人グループはお咎めなしですか』

『グラビアアイドルの遊佐ひとみがミュージシャンのタクミと不倫してるんだとき、探ってこい』

『主犯が大蔵省のお偉いさんの息子だから？』

『事件になってねエだろ』

『余罪もたんまりあるのに？ 他の子も話してくれたんです、録音したのだけでも聞いてください、みんなものすごい勇氣出して話してくれたんです』

『消せ。今すぐに。記者を続けたりやな』

こんな事をしたくて記者になったのか？ 雨の日の風の日も張り込んでるのか？

記者は正義の味方じゃない。

世相の味方だ。

『お前の正義感は迷惑なんだよ』

俺の記事は誰も救えない。

ただのゴミ、マスゴミだ。

そういわれてもしかたない人種になりさがった。逆らったらクビを切られる。いつそやめればよかったのか。

『特ダネ持つてこい、華のあるヤツな』

華ってなんだ？ 誰かが死んだり犯されたり、そういうのは地味なのか？ 読者は振り向きもしないのか。

『子殺しの母親の記事記事評判よかったぜ。高校時代パパ活で荒稼ぎしてたとか中一の頃から養父に性的虐待受けてたとか、やつばこーでなきやな』

『母子手帳のくだけは』

『は？』

『現場のアパートで見付かったヤツ。なんで削除したんですか？』

『あんな風祭。読者は虐待親の胸糞な所業と壮絶な過去を知りたがってたんだ、興ざめなお涙頂戴エピソードはいらねエよ』

『産婦人科で聞いてきたんです、定期健診にや毎回来てたって……細かい字でびつしり記録を付けてたんですよ、アレルギーのことも』

『子供殺しの鬼畜親が、母子手帳に初めてハイハイした日や歩いた日の事書いてたからなんだってんだ。それで虐待の事実がチャラになんのか、殺しちまった事実が許されんのか？ 読者は犯人をぶつ叩きてエんだよ。

実の子鬮り殺した母親がどんだけクソだったか知りたくて雑誌買うのに、本当は育児と生活苦のストレスで泣く手を上げちまったんですよとかヌルい雑音は余計だろ』

『これだって事実ですよ!』

上はスクープを催促する、エグくてきわどくて刺激的で扇情的な見出しを証言をよこせとプレッシャーをかけ続ける。

一番伝えたかった事実を伝えられない。

一番届けたかった核心が届かない。

書いても書いても没にされ、いい加減にしろと胸ぐら掴んでどやされて、追い詰められた遊輔は記者がしてはいけないタブーを犯した。

顔面で水が弾ける。

「! つ、」

目を見開く。視界が歪む。コップを掴んだ薫が、カウンターに腰かけて笑っている。

「頭痛は大丈夫?」

気持ちが悪い。頭がぐらぐらする。二日酔いの前借りか?

「お前……」

新宿二丁目、行き付けのバー。閉店後なのか誰もいない。やけに視点が低いと思ったら、後ろ手に縛られ床に伸びていた。

薫が見覚えのあるパスケースを開き、勝手に出した遊輔の名刺を弾く。

「何の真似だよ」

途切れ途切れの記憶を辿る。確か酔い潰れて……それからどうした？
こめかみが鈍く疼く。

視界の片隅でシェイカーを振っていた薫を回想、グラスに注がれた琥珀色の液体を思い出す。

「薬を盛ったのか」

「正解」

「目的は？」

「あなただよ、風祭遊輔さん」

薫が緩慢に片膝を抱き寄せ、鉄砲に見立てた人さし指を遊輔に擬す。

「人に恨まれる心当たりは？」

「腐るほど」

「だろうね」

記者は因果な商売だ。買った恨みなどいちいち覚えていられない。

薫の双眸が酷薄に細まる。

「週刊リアルなんて名前のくせに載ってる記事は全然リアルじゃない。大半はフェイクだ」

「くだらねえゴシップ雑誌だもん。電車の荷物棚に放置プレイされてるよ」

「卑下しないでください、哀しくなるじゃないですか」

「なんでお前が」

得体の知れない青年が、遊輔から奪った名刺にキスをする。

「ファンなんです」

「は……？」

「あなたのお得意な嘘ウソじゃありませんよ。証明しましょうか」

横たわった遊輔の鼻先に一冊のスクラップブックを投げてよこす。床に投げ出された拍子にファイルが開き、遊輔は息を飲む。

スクラップブックに綴じられていたのは、全て遊輔の署名入り記事だった。

何年かけてコレクションしたのか、切り抜きは大量にある。

「大物プロデューサーのセクハラ、タレントとモデルの不倫、イケメン俳優の大麻騒動……一番最近のは芸人の風俗通いですね」

「ストーリーカー？」

ドン引く。

「バイトも偶然じゃねエな」

「遊輔さんの行き付けの店だと知って潜り込みました」

「すげー取材力。いい記者になるぜ」

「本当ですか？」

待てよ、コイツさつきなんて言った？

「俺の得意な嘘ウソじゃねえって言ったか」

薫がカウンターから飛び下り、遊輔の正面に跪く。

「だってそうでしょ？ あなたの手柄になってる記事、殆どフェイクニュースなんですから」

フェイクニュースとはその名の通り、事実無根の捏造記事をさす。

穏やかな表情で遊輔を覗き込み、噛み含めるように説く。

「裏はとりました。自分で仕込んだんですよね？ 知り合いの風俗嬢に金を払って芸人を引っ張りこんだり、大物プロデューサーの所に好みのADを送りこんだり。大麻騒動の時は昔の友達をあたってたんですか？ 中高じゃ荒れてたんですね……家庭環境には同情しますよ」

「……………」

薫の推理は当たってる。

風俗嬢とADは元カノ、俳優に大麻を売ったのは学生時代の友人だ。どれも遊輔が裏で金を渡し、ゴシップの捏造を仕向けた。

スーツの下にじつとりと嫌な汗をかく。

「自作自演のゴシップで誌面を賑わせて、よく今まで告発されませんでしたね」

「共犯だからな。調子こいてるヤツらに痛い目見せてやれるって、連中乗り気だったぜ」

大衆は過激なゴシップを望む。上にはスクープを催促された。

毎日量産される悲劇が誌面を埋め尽くし、片や顧みられず取りこぼされた事実があり、やがて彼は仕事への情熱を失い、多くのフェイクニュースを作り出すようになった。

「既成事実の概念は偉大だな。書いたもん勝ち、載せたもん勝ちだ」

電車のシートに座ったサラリーマン、下車時は網棚に捨て置かれる雑誌、ホームレスに回収され十円二十円で叩き売りされるリアル、スマホでパソコンで匿名の連中がほざく『虐待する親なんて全員死刑でいい』『ハズレ引いたね』『ブラック企業死ぬ』『社畜乙』『まーた中央線遅延、自殺はよそでやれ』『レイプとかデマでしょ』『ブスの被害妄想痛い』

「連中が欲しいのはリアリティもつともらしさであつてリアル真実じゃねえ。そこをはき違えると取り返しが付かなくなる」

パワハラ自殺したサラリーマンの遺族に謝りに行った。妻は泣いていた。小学生の息子は誰も信じない目をしていて。レイプ被害の実態を話してくれた女子大生たちに謝りに行った。一番最初に取材に応じてくれた子は摂食障害が悪化、精神病院に入ってしまった。子供が虐待死したアパートに行った。有名メーカーのビスケットがおいてあった。死んだ子は米粉でこしらえた、一口サイズの動物クツキーが好きだった。小麦粉アレルギーで食べられない物があつたのだ。母子手帳には子供のアレルギーに悩み、追い込まれていく親の心情が切々と綴られていた。

「俺のファンにしちやあ節穴じゃねえ目をもつてるじゃないか。そうだよ俺は偽物フェイクさジャーナリストの風上にもおけねえニセモノさ、どうせお前らは見たいものしか見たがらない、知りたいことしか知りながらねんだから真実なんてどうだつていだら、捏造フェイクで十分じゃねえか」

せいぜい憎たらしい笑みを広げて開き直る。

「で、自称ファンでストーカーさんのリクエストは？ 握手でもしてやりや気が済むか、後ろ手縛られちゃ無理な相談だな」

自暴自棄な挑発に対し、薫は寂しげに呟く。

「俺の顔でわかりませんか」

まじまじと見返す。

艶やかな茶髪ときめ細かい肌、端正に整った面立ち……見覚えがある。誰かに似ている。

「富樫は母の姓です。父の姓は蓮見」

「蓮見尊の息子……」

愛妻家として知られた俳優。

遊輔のフェイクニュースで自殺した男。

「愛妻家がウリの父にとつて少女売春の報道は致命的でした。ラブホから出てくる瞬間を撮られたんじや言い訳できませんよね、アレも遊輔さんが撮ったんですか」

蓮見が買った少女は遊輔の知人だ。記事では女子高生と書いたが実際は成人済み。

「親父の復讐か」

無言で一步踏み出す薫。

その後ろから人影が湧く。数時間前までカウンターで飲んでいたサラリーマン。

「聞きましたよ大ウソツキめ。あ、あんたのせいでミゼルちゃんは業界を追放されたんだ」

「ミゼルって枕営業してた地下アイドルの」

「それはデマだろ！」

サラリーマンがヒステリックに地団駄踏む。薫が辟易した表情でとりなす。

「カウンターの裏に隠れてろって言ったのに」

「君がぐだぐだ回り道して核心に踏み込まないから！ やり方がぬるいんだよ、人を貶めることしか知らないゲスなマスゴミなんか殴る蹴るして吐かせりゃいいんだ。でもいい、もういい。さんざんゴシツプ捏造してたって認めたんだ、証拠は十分だろ」

手には特殊警棒が握られている。

「ミゼルちゃんを汚しやがって」

最初からグルだったのか。

薫が遊輔に薬を盛り、閉店後に共犯を引き入れた？

「待てよ逆恨みだ、あの娘は本当に」

「うるさい!!」

サラリーマンが奇声を発して腕を振り抜く。

遊輔が転がり逃げた床を風切る唸りを上げて警棒が穿ち、憤激に駆り立てられたサラリーマンが叫ぶ。

「ミゼルちゃんが！ 僕の天使が！ 地下アイドルの姫が！ 枕営業なんてするわけないだろ!!」

人間は信じたいことしか信じない生き物だ。

知りたいことしか知らうとしない手合いに、余計なお世話な真実を無理矢理突き付けたら――

「二度と記事を書けないようにしてやる！」

「!? ツ、」

狙いは腕。

まともにくらえばへし折れる。

一度は諦念に傾いだ心に火が付き、右に転がって強烈な一撃を回避。

「逃げるなマスゴミめ、ミゼルちゃんに謝れ！」

「痛ツぐっ!?!」

幼稚な罵倒に続き衝撃と激痛が炸裂。

咄嗟に体を入れ替え利き腕の右を守ったが、左腕を殴打された。

俺はゴミよばわりされてもいい、実際ゴミみてえなものを書いてきた、たくさんのヤツを破滅させて誰も救えなかった、嘘だろうと真だろうとゴシツプ記事を正当化できるもんか。

けど、仕事までゴミ呼ばわりされたくねえ。

コイツに殺られるくらいならいっそ――

「テメエがやれ、薫!!」

「ゴミみたいな仕事なんてないよ。ゴミみたいな人間がいるだけだ」

薫がサラリーマンの腕を掴み、鳩尾を蹴り飛ばす。サラリーマンがうっと呻き、即座に崩れ落ちる。

「ツは、たす、かつ、た?」

失神したサラリーマンを跨いで薫が接近、汗みずくで息を荒げる遊輔の縄をほどく。

「折れてはないみたいですけど念のため病院で診てもらったほうがいいかもしれません」

「親父の仇を助けたのは」

「あなたがやったのと同じ、狂言ですよ。少なくとも僕は」

あの記事を書いてくれて感謝してるんです、と囁く。

「父は外面がよかったから、家で起きてる事に誰も気付きませんでした」

「虐待か」

「見た目を損なわないタイプの」

形よい唇が自嘲に歪む。

「当時の俺はまだ子供で、どうすれば地獄から抜け出せるかわかりませんでした。母や先生に言っても信じてもらえない。そもそも言えるわけがない……世間は理想の夫、理想の父親と蓮見をもてはやします。味方は誰もいませんでした」

数々のフェイクニュースを生み出してきた遊輔の右手を握り締め、おのれの額に導く。

「あなたの嘘が救ってくれたんです」

彼だけがわかってくれた。

「何度も読み返しました。一言一句漏らさず覚えていきます。遊輔さん、書きましたよね。『蓮見尊の本性はただの俗物であり、その行為は被害者を傷付け、家族をも裏切っていたのだ』って」

そのとおりですよ。

「あなたの記事はデタラメだけど、どうしようもない真実を言い当てた」

被害者の薫しか知り得ぬ真実を代弁し、世に広く知らしめたが故に。風祭遊輔は富樫薫にとって、唯一無二の理解者にして恩人になった。

「イカレ野郎を引き込んだのは」

「あなたを調べてた時に偶然ネットで知り合いました。どれだけ言っても復讐を断念しないからいつそスッキリさせてあげよう」と

「殺人教唆か」

「危なくなったら止める予定でした、彼もこれにこりて手出しはしないはず」

「あのさあ……」

途方もない脱力感に見舞われた遊輔の前で、スマホで撮った動画を再生する薫。自分の記事はフェイクニュースだと暴露する声。

「脅迫の材料が手に入りました」

反射的に手をのばす。空振り。前に泳いだはずみに左腕に激痛が走り、のたうち回って呻く。

「警察に持ち込む？ ネット？」

「動画サイトに流しても面白いかも。もちろん俺の顔と声は加工します」

「金はねえぞ！」

「金は目的じゃありません」

全ては欲しいものを手に入れる為。

「あなたはとんでもないウソツキで、だからこそ俺の憧れです。咄嗟に利き腕を庇ったんだから、どんなにフェイクにまみれたってプライドは死んでませんよ」

まだやり直せる。

記事を書ける。

「ずっとあなたの記事を集めて、追いかけて、見てたんです。むかし書いた事件現場に通って、黙祷を捧げて、

どんだんダメになって、でもやっぱり足を運んで、何かをじつと願うあなたを。電車の網柵に置き忘れられたリアルを駅のクズ籠に突っこんで、ずんずん歩いていく背中を」

父親の買春を報じた記事の末尾、風祭遊輔の署名を一体何度くり返しなぞり、憧れの面影を膨らませたことか。

「フエイクニュースの常習犯だろうと関係ない、あなたに譲れない^{リアル}真実があるならどんな手を使っても証拠を掴んできます。使ってください」

「……ちようどよかった。嘘を作るのにや飽きた頃合いだよ」

申し出を拒めば破滅する。

破れかぶれに承諾した遊輔の右腕を掴んで起き上がらせ、薫は心の中で独白する。

俺とあなたは共犯だ。

俺はあなたの為に、あなたが掴み損ねた真実をすくいあげる。

『薫か？ ベッドに行つてろ』

あなたがあの記事を書いてくれたから。

自殺の動機までご丁寧捏造してくれたから、あの夜ベランダにたたずむ背中を押して、父を殺すことができ

た。

あなたの嘘で百人が不幸になろうと、俺だけは救われたから。

「バディ結成だ」

薫の手と遊輔の手は強く結ばれた。

バンダースナッチ

煙り狂えるバンダースナッチに近寄るべからず

『鏡の国のアリス』／ルイス・キャロル

この世界には人間に擬態した怪物が存在する。

連中は人に紛れて暮らしており、本性をさらけだすその瞬間まで怪物だとまずわからない。

間宮春人まみや はるとが怪物に魅入られたのは、そば降る雨が歓楽街のネオンを煙らせる秋の夜だった。

場所は新宿二丁目の雑居ビル、半地下下のバー。

階段を下りた先の扉を開ければ軽快にベルが鳴り、コの字型に仕切られたカウンターとテーブル席が出迎える。

「あら春人ちゃん、久しぶり」

オネエ言葉のマスターがむさ苦しい髭面に微笑を浮かべる。

「仕事は順調？ こつちには慣れた？ 上京して半年でしょ、ご家族に連絡入れたの」

矢継ぎ早に投げかけられた質問に苦笑し、右端のスツールに滑り込むのは細身の青年。擦り切れたジーパンと色落ちしたプリントTシャツをカジュアルに着崩し、両耳にシルバーのピアスを嵌めている。垢抜けた風貌に人懐こさを足す、無邪気な笑顔が魅力的だ。

マスターの挨拶代わりの軽口に青年……間宮春人は、お絞りで手を拭いて肩を竦める。

「おかんが分裂したみたい」

ここは春人の行き付けのバー。

ムーディーに照明を絞った店内にはワンナイトラブの相手を見繕いにきた男たちが散らばっていた。隅で互いの腰を抱き、乳繰り合っているカップルもいる。

マスターが頬杖付いた春人の前に、ストローを添えたカクテルをさしだす。

「ノンアルコールよ。未成年だもんね」

「カゴメ野菜ジュースみたいに綺麗なオレンジ」

「もうちよい言い方あるでしょ」

「なんて名前？」

「プッシーフット。可愛くない？」

「女性器プッシーのあんよ？ きも、キラードームみたい」

「なんでそっちは知ってるのよ。プッシーは雌猫って意味、女性器は俗語」

「ほなプッシーフットは肉球？」

「猫のようにこっそり歩くって意味らしいわ」

「売り専のネコと猫ひっかけたダジャレかい、しょーもな」

機嫌を直しグラスを掴む。

「お味のご感想は？」

「オレンジジュースをレモンジュースで割った味がする」

「そりやそうよ主成分だもん」

「なんや損した」

プツシーフットをちびちびなめる青年を微笑ましげに眺め、マスターが思い出したように呟く。

「多田さんが捜してたわよ」

「げっ」

「何、喧嘩？」

春人は「んー」と言い淀み、ストローでグラスの中身をかきまぜる。

続いて一口嚙下し、呟く。

「……あの人奥さんおんねん」

「げっ！」

今度はマスターが顔をしかめる番だった。

多田と破局に至った経緯を回想、カウンターに突っ伏し嘆く。

「あくも最悪や、どうして俺ってこー男運ないんかな？ そんなとこまでおかに似なくてええんのに」

「野暮は言いたかないけど浮気は感心しないわね」

「ゲイの偽装婚の是非はとやかく言わへんよ？ せやけど後出しはナシやろ、こっちは結構本気やったのに。

しかも子どもまでおるとかありえへん」

「男の子？ 女の子？」

「一男一女。上の娘が小五で下の息子が幼稚園、スマホに写真あった、全部で百二枚」

「数えたの？ ちよつと引いた」

「傷口に塩すりこまんといて」

「男なら他にいくらでもいるじゃない、早いとこ吹っ切っちゃいなさいよ」

「向こうから絡んでくるんやて」

春人は頭をかきむしり、元恋人への不満をぶちまける。

「しかもめつちや往生際悪いねん。もういちど話し合おうとかやり直そうとかLINEうるそうてかなわんからブロックしたつたわ、ざまーみさらせ」

「春人ちゃん既婚者はセフレにしない主義だもんね」

「おかんが妻子持ちに捨てられてえらい苦労したさかい」

「フツーにモテるんだから年が近い子選んだら？」

「年上が好つきやねん。内側から滲み出る父性とか包容力に惹かれんねん」

「加齢臭フェチ？ ファブリーズしたら目が覚めるわよきつと」

週末のバーに控えめな嬌声と囁きが充ち渡る。

同じグラスに注がれたカクテルをハート型ストローで飲むペアをチラ見し、カウンターに滴る雫で「の」の字を書く。

「はあ……どつかにええ男おらんかなあ」

春人が生まれ育ったのは関西の田舎だ。遊び場といえば国道沿いのイオンモールしかない、そんな場所。元OLの母は上司と不倫し身ごもった。

その後一人で春人を産み、パートを掛け持ちしながら育ててくれた踏ん張りには感謝しているものの、保守的な田舎の人々が未婚の母と子に向ける目は冷たく、物心付いた頃から疎外感と劣等感に苛まれてきた。

高校を卒業した夜にカミングアウトし、壮絶な親子喧嘩を経て家を飛び出したのが半年前。

上京費用と入居費用にはバイトで貯めた金を充てた。保証人がいない為借りられたのは築三十七年、六畳のボロアパートだったが、寝に帰るだけなので不便はしてない。

現在は東京でパパ活しながら気ままに暮らしている。売春には全く抵抗を感じない。

初めて体売ったのは中二の春、相手はイオンモールで声をかけてきた変態。男子トイレの個室に引込み、オーラルセックスと引き換えに三万円をゲットした。

以来味をしめ、金欠に陥るたびネットの掲示板でパパを募り小遣いをもらってきた。

春人は生来男好きセックス好き、こと性技に関しては向上心旺盛な勉強家ときている。加えて、パパ活の実入りは田舎と比べ段違い、時給換算のコンビニで働くのがアホくさくなるほどだ。

東京は天国。

二丁目こそ春人の居場所。

若くて顔立ちが整い、セックス上手な春人は需要が見込める。

東京駅に降り立った足で美容室に行き、髪を脱色しピアスを開けたのは身も心も生まれ変わったから。

ここなら性癖を偽らずとも生きていける、ゲイバレを気にせず好き勝手にやれる。

息子がイオンモールのフードコートで知らない男とお茶したというだけで、真面目に働いてる母まで白い目で見られずにすむ。

しかしプライベートの方は順調とはいかない。春人が惚れるのは総じてろくでもない男ばかり。

付き合い始めてしばらくすると他の男や女と浮気し、あるいは日常的に手を上げ、やれバチスロだの競馬だの稼ぎをむしり取っていく。

直近の恋人に至ってはこの人なら大丈夫だろうと心を許した矢先に既婚者と発覚、いくら春人が突っぱねても執拗に食い下がりとカー一步手前まで拗らせる始末。

先日は「春人が欲しくてこんなになっちゃった」とファンシーなりボンを結んだペニスの画像を送り付けられ、心底うんざりした。

「てか娘のコレクションくすねたんかい、最低のパパとパパ棒やな」

「一人？ 一緒に飲まない？」

「パス。三十以上やないと萌えへんねん」

「は？ 老け専かよ、きも」

「るっさい死ね」

その後も春人を口説く男は絶えなかつたが、ことごとく玉碎する。ただ一人を除いて。

「隣いい？」

凧いだ声に目を上げれば、甘いマスクの男が爽やかに微笑んでいた。続けざまにベルが鳴り新たな客が訪れ、マスターがもてなす。

「いらつしやい」

頭のとっぺんから爪先まで値踏みし、カクテルを一口飲んで「どうぞ」と促す。

男が「どうも」と会釈して隣に掛ける。洗練された物腰に好印象を抱く。年相応に清潔感ある身なりと無個性に整った顔立ちにも惹かれた。

年の頃は三十代前半、守備範囲ト真ん中に剛速球が投げ込まれる。

三十分後、意気投合した二人は店を出た。

「お代おいとくで」

「ありがとーまたきてねー」

客の相手に夢中なマスターは春人の背中を一瞥しただけ、連れに至つては殆ど記憶に残つてないとのちに証言した。

バーを後にした春人はネオンが滲む歓楽街を抜け、男が住む家に連れていかれた。

そこは閑静な住宅街にたたずむ、二階建ての一軒家だった。春人は口笛を吹く。

「すごいとこ住んどるやんジブン。さては金持ち？」

「親がね」

男が鍵をさしこんで回す。玄関から向かつて右手は、オールドアメリカンスタイルで統一されたリビングになっていた。

「こないデカイ家に独り暮らしとか持て余すやろ」

「お客さんは大歓迎」

「靴脱がな」

「洋式だからそのままで」

一階にはリビングとダイニングキッチンにバスルーム、二階には寝室と書斎があった。まごうことなき豪邸だ。
「飲み直す？」

「酒あるん？」

「地下室をホームバーに改装したんだ」

「マジ？ 海外ドラマでしか見たことないわ」

「がぜん興味をそそられ、男に付いてコンクリの階段を下りていく。もしこの時引き返していたら、春人は明日の新聞に載らずにすんだかもしれない。」

「ここが俺の秘密基地」

なるほど、自慢したくなるわけだ。

艶やかな大理石のバーカウンターにはスツールが三脚並び、後ろの棚に高級ウイスキーやワインの瓶が並んでいる。アースカラーのクッションを添えたカウチや最新型のテレビも完備され、ちよつとした大人の隠れ家の趣だ。

「あのドアは？」

「ゲストルームさ」

「へえ……」

地下室に客室があるのを少し妙に思ったものの、金持ちの道楽だろうと流す。

「座って。ごちそうするよ」

カウンターの内側に回り込んだ男が、鋭く尖ったアイスピックで氷のかたまりを砕き始める。春人はスツールに飛び乗り茶化す。

「未遂年にアルコールすすめるなんて悪いおっさん」

「今さらだね」

男が作った水割りで乾杯する。喉越しなめらかで美味だ。

酒に酔った春人は上機嫌で生い立ちを話す。

母子家庭で生まれ育った事。父親の顔を知らない事。初恋は小五の時の担任。中二の春からパパ活していた。稼ぎが安定したら母に仕送りしたい。

男は春人の身の上話に相槌を打ち、いまだき珍しい親孝行だと褒め、熱心に耳を傾けた。

「今は若いからまだええけど、ずっとフリーでやってくのも厳しいかなて」

「複数キープして貰がせてるんだろ？ 悪い子だ」

「おいおい店に所属することも考えなあかんかな、ゲイ専門のデリバリー風俗とか。おすすめ知つとつたら教えてや」

「生憎そつちは詳しくなくて。素人の子が好きなんだ」

「俺はセミプロか」

「君なら上手くやれるさ、コミュ力高いもの。初対面の俺ともすぐうちとけたじゃないか」

「そうかな。そうやな。アンタは何の仕事しとるん？」

「株のトレーダー。基本在宅」

「へえ〜ようわからんけどすごいなあ」

男の趣味は音楽鑑賞らしく、コレクションした古いレコードを披露してくれた。マガジンラックには他にも多数の円盤が収まっていた。

「レコードは暗くて冷たい場所に保管するんだ。日に当てるとすぐダメになる」

「音楽聞く為に地下室作ったんかい」

「ここなら誰にも何にも気兼ねせず趣味に耽れるからね」

世の中物好きがいるものだ。音楽に疎い春人には、男が饒舌に語る七十年代のブリティッシュロックの魅力がびんとこない。

宅飲みを切り上げる頃には三時間が経っていた。男がおもむろに春人の肩を叩く。

「先にシャワー行ってくる。あつちで待っていてくれ」

「オーケー」

階段を上がり浴室へ赴く後ろ姿を見送り、ゲストルームのドアノブを回す。

壁のスイッチを手探りし明かりを点ける。モノトーンで纏めた部屋を中心にダブルベッドが鎮座していた。窓はない。地下室だから当たり前だ。机の上にはノートパソコンが開かれている。壁際にはオーディオ機器が揃っていた。

「殺風景やな……ん？」

ベッドの反対側に奇妙な絵が掛けられていた。斧を構えた小人の周りを無数の妖精が取り囲む絵。

小人はこちらに背中を向けており顔は見えない。

地面に落ちた木の実を割ろうとしているのか？

正面にたたずみ、アルコールと眠気に濁った目で絵画を鑑賞する。

「変なの」

余白を許さない密度の高さが息苦しく、細密な描写に偏執狂的なブレッシヤーを感じた。少なくともゲストルームに飾りたい絵じゃない、悪夢の世界に迷い込みそうだ。

「あゝ……酔っ払ってもた」

両手を広げて倒れ込む。背中がマットで弾み、前髪が額にぼらける。天井ではレトロな四枚羽の扇風機が回っていた。

「ん？」

机上のパソコンがスリープ状態になっていた。一抹の後ろめたさを覚えたが、好奇心には勝てず腰を浮かす。「エグいゲイビあつたりして」

出来心だった。

魔が差したのだ。

見るんじやなかったと悔やんでも遅い。

液晶を覗き込んで固まる。

「なんやこれ」

呆然と立ち尽くす春人の耳に突如音楽が鳴り響く。

舌打ちに似て小刻みな前奏、^{イントロ}続く駆け足のメロディー。物悲しい歌声が英語の歌詞を吠えさせてる。反射的にパソコンを閉じて振り向けば、男が後ろ手にドアを閉め、口元だけで笑っていた。

閉じ込められたと直感する。

全裸に純白のガウンを羽織った男が、小首を傾げるようにして聞く。

「この曲知ってる？」

チチチチチチチ、時を刻む秒針のような前奏。春人が動画を再生している間にオーディオを起動したらしい。再びリモコンを操作しボリュームを上げ、油断なく接近を図る。捕食者が優位を誇示し、獲物をいたぶり追いかつめる足取り。

「来んな！」

震える声で制すも遅く、男が目の前までやってくる。

「この曲の名前は？」

「知らんわ変態そこどけ、さもないと警察に」

回答を間違えた。

男の目の温度が急激に冷え込んでいく。

「はずれ」

「ぐっ!?!」

腹に衝撃が炸裂。見ればスタンガンが鳩尾に食い込み、青白い火花を散らしていた。

「学校の先生や親御さんに教わらなかつたかい、人の話はちゃんと聞きなさいって。自分の不幸自慢に夢中だった？ 君が悪いんだよ、正解できたら帰したのに……」

たまらず崩れ落ちる春人を抱え、小人の絵を背負った男が嘆じる。

「ヒントはあげた。俺は公平フェアにいきたいんだ」

うなだれた頭をかき抱き、囁んで含めるように囁く。

「正解はクイーン、『妖精フェアリーのきこりの神業』」

「解散したバンドやん、ぐあッ」

スタンガンの先端が再び食い込んで放電する。

「クイーンは解散してない。現役だ」

「あッ、がッ」

内臓を鞭打たれるような衝撃と激痛に不規則な痙攣が襲い、白濁した泡を吹く。

人間の擬態が剥がれ、恐るべき怪物の本性が暴かれる。

「和訳タイトルは『お伽の樵の入神の一撃』。君が見ていたのはイギリスの画家、リチャード・ダッドの複製画。アウトサイダーアートの代表作と言われている」

共感力が欠如した昆虫の瞳が、苦痛に喘ぐ春人の顔を無機質に映す。

「ダッドは足かけ十年かけ、精神病院でこの絵を描き上げたんだ」

三半規管が攪拌され、酩酊感と嘔吐感が同時に襲い、全身の筋肉が弛緩していく。

思えば最初から妙だった。

何故先にシャワーを浴びたのか。何故春人ひとりだけをゲストルームに行かせたのか。

無人の部屋の机の上、ノートパソコンのモニターが点けつばなしで立てられていたら誰でも注意がいく。

「もつとよく見てごらん。修道士、馬丁、御者、修道士、メイド、踊り子……たくさん集まつてるだろ？ みんな妖精のきこりの渾身の一撃を見に来たんだ。草葉の陰でこっそり乳繰り合つてる、けしからんカップルもいるけどね。かえってリアルじゃないか」

^{ギョウリ}観衆の注視を受け、高々と石斧を振り上げる小人の雄姿に男が重なる。

かち割ろうとしているのは地面に撒かれたどんぐりか、床に突つ伏した春人の頭か。

秘密の森の奥、祝祭の狂騒に身を委ねた妖精たちが愉快に跳ね回る。

古いロックが部屋を圧し、首尾よく事が運んでご満悦の男がサビを口ずさむ。

何言つとんのか全然わからん。

英語、ちゃんと勉強しとけばよかった。

コンクリ打ち放しの床に倒れた春人は、ベッドの下に突つ込まれたいかがわしい道具の数々を目撃する。

銀の光沢の手錠があった。革に鋏を打った首輪があった。極太のデイルドにバイブレーター、ローターやエネ

マグラにアナルプラグ、黒いバラ鞭と乗馬鞭も用意されてる。そこまではいい。

春人の趣味じゃないが、Sエグズとして最低限の知識はある。

理解できないのは洋梨に似た紡錘形の器具で、用途が全くわからない。

わからないから妄想が膨らむ、恐怖が加速し暴走する。

「誰か！ 人殺しや、警察呼んで！」

必死に声を張り上げ助けを呼ぶ。男の眼差しがひとかけらの憐憫を帯びる。

「無駄だよ、防音は完璧だ。どのみち我らが偉大なる妖精のきこりの雄叫びにかき消される」

ああ……いちじく浣腸に似とるな。ガキン頃おかに突っ込まれてギャン泣きしたっけ、懐かしな。

「レイプされる位なら舌噛んだ方がマシ」

「じゃあギャグか猿轡をするよ。詰め物は顔の形が変わつちやうから好きじゃないけど、仕方ない。でも綺麗

な顔の子に棒ギャグ噛ますのはそそるよね、サディスティックで。唇フェチなのかなあ？」

話が通じない。

「それは苦悩の梨。異端審問に用いられた中世の拷問具で、膣や肛門に挿入するんだ」

男が片膝に体重を移し、ベッドが不吉に軋む。

痺れた体がベッドに投げ出され、両手に手錠が噛まされる。

「魔女狩りの犠牲者には男も含まれた。男の魔女なんておかしいよね。キリスト教の価値観じゃ男色も罪らし

い

「助け、て……うち帰して」

誰も春人がここにいると知らない。

故郷をでたきり母とは連絡をとってない。

修道士、馬丁、御者、修道士、メイド、踊り子……絵画に犇めく妖精たちが残忍に嗤いながら、囚われた青年を見下ろす。

きめ細かくしなやかな手が頬を包み、狂気を孕んだ双眸が弓なりに反る。

「怯えてるの？ 可愛いなあ」

片手で器用にボタンを外し、シャツの合わせ目を寛げていく。さらけだされた胸板をなでまわし、乳首を優しく抓り、引き締まった腹筋をゆるゆるさする。

「贅肉が付いてない。仔猫ちゃんフッの肉球トみたいな綺麗なピンクの乳首だ」

遠く近く声が歪み、唄うような抑揚が鼓膜を浸す。頑として拒む心と裏腹に、緩やかな愛撫が股間に熱を集めていく。

視界の片隅で男が箱を探り、極薄のラテックス手袋を装着する。解剖医のように手際が良い。

「ドラッグ？」

「ご想像におまかせするよ」

あの水割りか。

体が痺れて動かないぶん感覚がクリアに冴え渡る。男がハンディカムのビデオカメラを捧げ持ち、ぐったり仰向けた春人をズームで映す。

合間合間に手を止め、ベッドの上におぞましい道具を並べていく。

ペンチ。金槌。万力。アイスピック。注射器。脱脂綿。輸液袋。顔のすぐ横に置かれた苦悩の梨にいやでも目がいく。

脂汗にまみれた顔に憎々しげな笑みを貼り付け、春人が唸る。

「……クツソ悪趣味なお医者さんごっこやな。イカレとんでアンタ」

「知ってる」

「さわんな言うとるやろ変態」

呂律が回らず虚勢が剥がれる。アドレナリンと汗が過剰分泌され、眼球に毛細血管が浮かぶ。

どんなに暴れた所で金属の手錠は外れない、いたずらに皮膚が擦り剥け手首を痛めるだけ。キツく瞑った瞼の裏に母の顔が去来し、消える。

まだ仲直りしてへん。

脳裏を走馬灯が駆け巡る。母、マスター、東京にきてからできた友達一人一人の顔がチラ付いて絶望が募り行く。

「当分動けないだろうけど念のため」

男が春人のスマホを奪い、電源を切って放り投げる。

『東京行く？ アホなこと言うてへんでさっさと就職しなさい』

『おケツの青いガキが世の中なめたらしつぺ返しくうわよ』

『よー春人、イケてるパパ捕まえたんだって？ 飽きたら回してくれよ、おごつから』

男が掲げたカメラが低い音たて作動する。チチチチチチチ、小鳥の囀りに似たきこりの一撃の前奏が響く。左手にカメラを構え、右手に使い捨て手袋をはめた男が、春人の股間をまさぐりアナルをほぐす。

「拷問吏の中には火でよく炙り突つ込むヤツもいた。昔の人は残酷だよね。安心して、俺はそこまでしない。手間だし火は苦手なんだ」

まだ親孝行してへん。

「おかん……」

近場の大阪でなく東京に出てきたのは、地元の間と会うのを避けたから。自分さえ消えれば母が後ろ指をさされることもなくなる。

だからといって、こんな消え方は望んでない。

顔。首。腕。腹。足。フエイトンユアングル倒錯的な画角で体のパーツ一個一個をおさめていく。

「ごらん。こうするんだ」

春人の鼻先に苦悩の梨を突き付け、ゆっくり螺子ねじをひねり展開する。

丸く膨らんだ房に切れ目が走り、拡張され、美しく花開く。

「芸術的だろ」

心が去勢される。

再び螺子を回し刃を収束させたのち、春人のズボンをひん剥いて、下半身に固く冷たい金属をねじこむ。

「いやや、たすけて。あ、アンタのこと死ぬほどいき狂わせて気持ちよオさせたるさかいおねがつ、あ、あ、あ、ッひうぐッ」

命乞いが磨り潰される。ラテックス手袋の滑らかな感触に鳥肌立ち、諦め悪くシーツを蹴り立てる。

「あぐつ、あがつ、あああつあ、あああ」

「拷問に特化した素晴らしいデザインだよ、そうおもわない？」

大量の血が下肢を伝いシーツを染めていく。

「俺は妖精フェアリーフェラーの木こり。可哀想で可愛い君を、今から鬻り殺す男だ」

奥多摩の山林で全裸男性の死体発見 殺人の可能性濃厚か？

十月十七日未明、奥多摩の山林で全裸男性の他殺体が発見された。遺体の身元は都内在住のフリーター、問宮春人さん（十八）。

問宮さんは先月三日夜に行き付けのバーを訪れて以降消息を絶っていた。解剖の結果、春人さんの遺体には生前と死後の二度に亘り性的暴行を加えられた形跡があった事が判明。警察は人間関係のトラブルが原因と見て、問宮さんの身辺を調べている。

この世界には人間に擬態した怪物が存在する。

たとえばバンダースナッチ。

たとえばフェアリーフェラー。

放課後のスタバにて。

テーブル席で喋っていた女子高生グループが、スマホの新着通知にはしゃぐ。

「お、バンダースナッチのライブ」

「マジ?」

夜のオフィスにて。

栄養ドリンクの空き瓶が積まれた机で残業していた社畜が、パソコンにかぶり付く。

「待ってました!」

電車の吊り革を掴んだ大学生が、繁華街を歩くカップルが、自転車に跨る予備校生が、コンビニのバックルムで休憩中のバイトが、台所で皿を洗っていた主婦が、暗い部屋でポテチ袋を開けたひきこもりが、同時刻に別々の場所で反応を示す。

同接のカウンターが回る、回る、回る。

『キター——(。∠。)———!!』 『待ってました!』 眼鏡を押し上げる 『今回はどんなクズが吊るし上げられるか楽しみ〜』 新色のネイルを吹いて乾かす 『期待上げ』 『素顔気になる』 『お面とって』 『やらせ乙』 『目立ちてえただけだろ』 『捏造乙』 割り箸に絡めた麺をずるずる啜る 『火のない所を焼野原にする天才』 ガスの元栓を開いてコンロに点火 『例の汚職議員は捕まったじゃん、秘書に首吊らせた人』 クツションを抱っこする 『超大物司会者のパワハラ暴いたんだろ?』 『燻り狂えるバンダースナッチに近寄るべからず』 蛇口を締め皿の水を切る 『子連れでバス乗車拒否された』 『ランキングの不正暴いて』 『俳優〇〇の自殺は政府の陰謀』 ポテチをバリバリ噛み砕く 『サクラ多すぎ』 『DM読んでくれました?』 『いじめっ子の☒☒に復讐してくだ』

『住所書くなバカ』『スルー推奨』

新聞や雑誌の活字を切り貼りしたような……あたかも脅迫状態、統一性のないフォントのタイトルがカットイン。

バンダースナッチ

『じらすな』『早く早く』『期待上げ』『今度は何だろ?』『ファンです、握手してください』『死ぬ偽善者』『アンチ乙』『消えろ』『ヒーローはヒーローでもアンチヒーローでしょ』

右枠に殺到するコメントが伝える凄まじい熱量。比例して爆発的に跳ね上がる期待値。画面に映し出されたのは殺風景な部屋。どこかのマンションの一室だろうか。

「You see, a minute goes by so fearfully quick. You might as well try to stop a Bandersnatch!」

ボイスチェンジャーを介しなお完璧な英語の発音が、今宵の祭りの開幕を告げる。

「『一分は恐ろしく素早く過ぎる。一匹のバンダースナッチを押しとどめる方がまだ楽だ』。ルイス・キャロル著『鏡の国のアリス』で、白のキングが放った言葉だ」

画面右端からフレームインしたのは、カートゥーンタッチに戯画化されたうさぎのきぐるみの頭部を被った男。カウンターが回る。たった一分で千人増えた。うさぎ男は画面中央に立ち、片手を挙げて振ってみせる。

「ごきげんようみんな、また会えて嬉しいよ。はじめましての人ははじめまして。今回『バンダースナッチ』が取り上げるのは」

軽快に指を弾き映像を流す。

『テッシーだ』『朝ドラヒロインの父親役?』『好感度ランキングトップ10の常連』『おっさんじゃん』『この人何したの?』

スマホでパソコンでタブレットで、仕事中に勉強中に食事中にデート中にトイレ中に家事の最中に生配信を見ている視聴者が一斉に発言しだす。

「勅使河原聖、本名勅使河原誠四十歳。ドラマや映画、バラエティーで活躍する国民的人気俳優。誠実そうナルクスと物腰柔らかく謙虚な言動が親しまれ、子供からお年寄りまで幅広く支持されてる」

一呼吸おき、爆弾を投下する。

「……そんなてっシーの裏の顔を知りたくない?」

『超知りたい』『教えてー』『パパ活してるとか?』『不倫じゃねーの』『マネージャーにパワハラとか』
虚実入り乱れた憶測が飛び交い熱狂が高まっていく。うさぎ男は視聴者の予想が出揃うまで待機する。

凄まじい速さで流れゆくコメントを傍観し、時に相槌を打ち、おどけたパフォーマンスで茶化す。『#バンダースナッチ』がTwitterでトレンド入りし、SNSに拡散されていく。

無表情な笑顔を貼り付けたうさぎの被り物が、年齢性別不詳の濁声を発する。

「これを見てほしい」

隠し撮りした映像が流れる。夜、歓楽街のラブホに入っていく年の差カップル。

片方は黒い目線が入った中学生位の少女。その肩を抱くサングラスにマスクの男は――

「勅使河原聖は児童買春の常習犯。隣の子は十四歳、義務教育中の中学生だ」

『えー!』『幻滅』『ロリコン死ぬ』『ただのパパ活でしょ』『本当に十四? 証拠は?』『学生証アップ希望』

『恋愛は自由』『買春は犯罪』『↑売春もね』『女にだまされたんだろ』『てっしーは被害者、悪くない』

『ただのクソビッチか』『メスガキわからせ?』

チャットの流れが加速する。うさぎ男は両手の五指の先端を合わせ、三角を作る。

「確かに恋愛は自由だ。日本における性行為の合意年齢はちよつと前まで十三だった。でも……相手が十三歳以下でも、同じことが言えるかな」

切り札を切る。

机から抱え上げたノートパソコンのキーを叩き、嚴重なプロトコルを破り、ハッキングした情報を呼び出す。

「勅使河原聖のパスポートの渡航記録。大体半年に一度の頻度で東南アジアに旅行してる。タイ・フィリピン・

カンボジア……目的は? 観光? 違うね。ボランティア? 本人はそう思ってるかも」

さらに隠し撮りした動画を投下する。ラブホテルの駐車場で、勅使河原が嫌がる中学生にキスを迫っていた。

「向こうの貧しい少女を買いあさってるんだ」

『小児性愛者かよ』『最悪』『ガチじゃん』『きも』『てっしーのファンやめます』

うさぎ男が肩を竦める。

「勅使河のお気に入りは夜の街を徘徊している片親家庭の少女、金銭的援助を申し出る代わりに体を要求する。片や発展途上国に通い、まだ初潮も来てない子たちをもてあそんだ。なんで逮捕されない? 問題はそこ。勅

使河原聖は今を遡ること五年前に警視庁のプロモーション番組に出演している、その際知り合った高官と随分

仲良しみたいなんだ。一緒に旅行しちゃうくらいにね」

後はわかるだろうとほのめかし、愛嬌たっぷり両手を振ってみせる。

「以上が『バンダースナッチ』が掴んだ勅使河原聖の真実だ。信じる信じないはご自由に。またね」
配信終了と同時にビデオカメラを止め、蒸れた被り物を脱ぐ。

「ふー」

被り物の下から露出したのは中性的に整った素顔。猫つ毛の茶髪が揺れ、綺麗な二重の双眸が瞬き、細い鼻梁が外気にさらされる。

SNSのトレンドを埋め尽くすバンダースナッチの正体は、年の頃二十代前半の美しい青年だった。

「遅刻ギリギリだな」

これだけ炎上させれば警察も無視できまい。青年——富樫薫は世間の反応に満足し、素早く身支度にとりかかる。

―池袋 クラブ『サウダージ』―

紫とオレンジのネオンが妖しく錯綜し、踊りにきた男女でこつた返すフロアが熱狂に包まれる。ステージ上では天球に見立てた銀色のミラーボールが回り、極彩色の光を放射線状にまき散らす。

コネとカネがない一般客が出入りできるのはここまで。奥はVIP専用ルームとなっており、会員証を持ったごく一部の人間しか通れない。

防音仕様の扉の向こうには臙脂色のソファを配置した空間があり、向かい合わせに座る男二人が派手な女を侍らしていた。

テーブルの上には所狭しと酒や肴が並び、灰皿にうずたかく積もった吸殻が煙を燻す。

一方は遊び慣れた風情の茶髪の青年、一方はアッシュブロンドに染めた髪を刈りこんだ半グレのリーダー。両者とも女に夢中で、グラスや皿を片す従業員には目もくれない。二人の間にはビニール袋に小分けした、カラフルな錠剤が置かれている。

黄色い嬌声を上げる女とじゃれあいながら、アッシュブロンドの若者が口を開く。

「例の件はこつちで片付けときましたよ、悠馬さん」

「悪いね。びびってた？」

「彼氏や家族の話チラ付かせたらいちころでしたよ」

「はは、ざまあ。警察行くとか馬鹿な事言い出すからだよ」

「なー？」と肩を抱いて同意を求める青年に対し、「ねー」と笑い転げる女。

アッシュブロンドが露骨に気分を害し、しなだれかかる女を押しつけて苦言を呈す。

「最近派手にやりすぎじゃないっすか。後始末すんのは俺たちなんですから、ちよつとは反省してくださいよ」
 「ごめんごめん。けどさ、お前たちだつて俺のおこぼれでさんざんおいしい思いしてんだろ」

「親父さんに愛想尽かされても知りませんよ」

「大丈夫だつて。俺つてほら、一人っ子だからさ？ 大学の単位はちゃんとキープしてっし、表じゃボロ出さねえように振る舞つてるよ。人生息抜きは必要だろ」

「裏口入学でしようせ」

コイツが偏差値七十の名門大の学生だというのだから、世も末だと鼻白む。

中村悠馬は半グレ組織『ケルベロス』の得意客だ。父親は与党の有力議員で、悠馬はその一人息子である。物心付いた頃から裕福な両親に甘やかされて育つた悠馬は、大学生になつてもまだ悪い遊びをやめられずにいる。現在悠馬が所属しているのは遊ぶことしか考えてないパリピが集まるヤリサーで、女子学生への強引な勧誘が問題視されていた。

「あーん」

悠馬が酒を含み、女に口移しで飲ます。細い喉が艶めかしく蠢き、肌がみるみる紅潮していく。女が酒を嚙下するのを確認後離れた悠馬は、唇と唇を繋ぐ唾液の糸を拭い、性懲りなく笑っていた。

「上がるクスリだつて言えば簡単に信じんだから、女つて馬鹿だね」

「今回のヤツはだまされたとか絶対訴えるとか騒いでたつすよ」

「あー、アレは手こずつたな。用心深いのかなんなのか、いくら勧めても乗つて来ねえからいい加減じれて、トイレに立つた隙に細かく砕いてすり潰したのカクテルにまぜたんだよ。したら案の定」

当時の興奮を反芻し、ビニール袋から出した錠剤を摘まんでひねくり回す。

悠馬の手のひらに乗っているのはハートや星を模したドラッグで、パツと見ラムネそっくりだった。子供が間違えて食べてもおかしくない。

「コーゆーのどこで仕入れてくんの？」

「製造工場見学にきます？」

「行く行く」

「冗談っすよ」

半グレがソファアの背凭れに背中を沈め、ピンクや水色の錠剤を詰めたビニール袋を掲げる。

「ベトナムから輸入してるんです。向こうじゃキャンデイタイプの新薬ドラッグとか言われて、小学生にまで出回ってるらしいっすよ。実際チョコレートやイチゴ、桃の香りがするんです」

悠馬が指の匂いを嗅ぐ。

「ホントだ、フルーティーな香り」

「色もバステルカラーで可愛いし、軽く摘まめつから女受け抜群。よく考えますよね、大量生産だから仕入れも安くすんでツイてました」

「ピンクファアの手錠と一緒に、低能どもはファンシーな見た目にころつとだまされる。まったく救えねえな」
ケルベロスが主に取り扱っているのは東南アジアで製造されたデートレイブドラッグ。主成分は睡眠導入剤のフルニトラゼパムであり、酒に混入した場合はコップ一杯で意識が飛ぶ。

「渋谷のハロウィンでばら撒かれたり、ここ何年かで結構メジャーになってきたっすね。受験勉強の眠気覚ましやダイエツトサプリ代わりにガキがネットで買うんですよ、顧客リストの最年少は都内のミッシヨンスクールに通ってるJCっす」

「いいねえ、マニアに高く売れそうだ。首までどつぷり漬けて礼拝堂で撮ろうぜ」

興味津々身を乗り出す悠馬の提案を「そのうちに」と受け流し、テーブルを拭いていた従業員をどやす。

「もたもたやってんじやねえよグズ。ピンドン追加な」

「すいません」

頭を下げて詫げる様子に舌打ち、忌々しげに観察する。見ない顔……新入りだろうか。真ん中分けにした黒髪が揺れ、銀縁眼鏡の奥の双眸が気弱そうに俯く。

グラスの中身を干した悠馬が、調子っぱずれの声でがなりたてる。

「ドラッグと 気付く頃には ドハマりだ」

「五七五っすね」

「下の句は手遅れとどつちにするか迷って韻踏んでみた」

「一応聞いときますけど、アンタは手エ出してないっすよね？ 跡取りヤク中にしたら親父さんにぶっ殺される」

「ドラッグは盛るもの、食うもんじやねえ」

さも心外そうに肩を竦める。

悠馬はドラッグを用いたデートレイプの常習犯だ。大学の内外に及ぶ被害者の中には、学校を辞めた子や自殺してしまつた子もいる。

彼が仲間と共に輪姦した女性たちが泣き寝入りを余儀なくされる背景には、悠馬の父親の脅しとケルペロスの暗躍があった。

現議員の父親が被害者とその家族に多額の口止め料……もとい示談金を払ってきた故、悠馬には奇跡的に前

科が付いてない。

半グレたちとの付き合いはかれこれ五年続いている。

初めてケルベロスに接触したのは高校生の時。女に言うことを聞かせるためにドラッグを求めたのは否定しないが、それ以上に退屈な日々をぶち壊す刺激が欲しかったのだ。

以来定期的にドラッグを購入し、時にはこうして取引を兼ね、接待の場をもうけてやってる。

ケルベロスは暴力装置として有効だ、たまに酒をおごり飼いならずメリツトは十分にある。身の程知らずな女がとち狂い、警察に駆け込もうとした時は家に差し向ければいい。

とはいえ、ケルベロスをけしかけるケースは少ない。そんな面倒くさいことをしなくても、弱みを掴まれた被害者たちはまず逆らえない。

すっかり酔っ払った悠馬がスマホを両手に持ち、下卑た笑みを浮かべ腰を浮かす。

「新作見る？ いい出来だぜ」

液晶をタッチ、動画を再生。ソファーに寝そべる半裸の女と、彼女に群がる男たちが写し出される。撮影場所はここだ。

「よく撮れてますね」

「デートレイパーシリーズ第……何弾だっけ？ 八弾？ 忘れちゃった」

「意識ねエのが惜しいっスね」

「睡姦マニアは悦ぶ。それにほら、眠っててもちゃんと感じてんだろ」

悠馬が得意げに動画を見せびらかす。強姦される少女の顔が苦しげに歪み、透明な涙が頬を伝っていく。

半グレが生唾を飲んで見入り、女たちが耐えきれず顔を背ける。スマホを傾けた悠馬が嗜虐的な笑顔で呟く。

「そーいや凄エの手に入れたんだ」

「何スカ」

「スナッフフィルム。本物の」

「海外の？」

「いや、日本人の。俺と同じ位の男が変態に鬨り殺しにされてんの、そっちのケはないけどエグいしグロいしぶっちやけ滾った」

次の瞬間、思いがけない事故が起こる。

「!? ツ、てめえ何すんだ！」

「すいません、手が滑って……」

今の今まで存在をド忘れしていた従業員が、こともあろうにドンペリの瓶を倒し、悠馬のスマホを酒浸しにしたのだ。

「ぼけっとしてんな、とつとと布巾よこせ！」

怒号をはなつてテーブルを蹴飛ばした拍子に何かが落ち、一同の視線が床に集まる。黒く細長い機械部品が落ちていた。盗聴器。

「これは」

言葉を失い固まる人々の視線が、糊の利いたワイシャツに黒いベストを合わせた従業員に立ち返る。

「やべ」

年の頃は三十代前半。真ん中から分けた黒髪の下、銀縁眼鏡の奥の三白眼が驚きと焦りに見開かれる。

「とっ捕まえる！」

半グレが腰を上げるより早く、いちかばちかの賭けに打って出る。

お絞りを掴んで凍る悠馬の手からスマホをひったくり、テーブルをとびこえる。

「てめえ！」

ドアをぶち破った勢いで見張りをはねとばし、大音量の音楽が響く通路を全力疾走し出口をめざす。

余計な事をするんじゃないかと今さら悔やんでも遅い。手遅れだ。

背後で怒号が炸裂し足音が殺到、殺気立った従業員と客たちが呼んでもないのにわらわら沸いて出る。

「何？ 泥棒？」

「予備の制服がなくなってる」

「部外者が紛れ込んだのか!？」

途中までは上手くいった。何食わぬ顔で従業員を装い、VIPルームに仕掛けた盗聴器を回収する計画だった。まず最初にサウダージのサイトをハッキングし、従業員の個人情報徹底的に調べ上げた。そのうちの一人が多額の借金を抱え、返済に追われているのを突き止めたのち接触。

報酬を払って手引きを頼み、裏口からまんまと潜入を果たしたまではいいものの、最後の最後にやらかした。後は盗聴器を回収して帰るだけだったのに……

悠馬と半グレが笑いながら見ていた胸糞悪い動画の断片がチラ付き、ぎりつと奥歯を噛み締める。

走りながらまどろっこしげにボタンを外し、片腕を振り抜いてベストを脱ぐ。

「スマホ返せ！」

「ぶっ殺してやる！」

サウダージのマツプは事前に頭に叩き込んだ。従業員専用通路は一方通行、突き当たりのドアは裏路地に繋がっている。

風切る唸りを上げて飛来した酒瓶が耳朶を掠め、進行方向の床で割れ砕ける。

反射的にそばの消火器を掴み、バルブを全開にしたのち半グレ集団に向け噴射。

「ぎゃっ！」

「くそつたれ、目が見えねえ！」

白い粉塵を浴び悶え苦しむ半グレ集団と悠馬の方へ、消火器を投げ飛ばす。

消火器を踏ん付けた連中がドミノ倒しに転ぶのに「よっしや」とガッツポーズ、裏口のドアを開けるや渾身の力で振り下ろされた鉄パイプが前髪を薙ぐ。

やっばり先回りしていたか。

裏口で待ち伏せしていた残党が扇状に展開し、遊輔を包囲する。遅まきながら追い付いた悠馬が、肩で息をし詰め寄ってくる。

「誰だよおっさん。警察？ スパイ？ それとも」

「通りがかりの盗聴器セールスだよ」

「んなもんがいてたまっか！」

「わかった落ち着け。お前が欲しいのはこのスマホだろ？ 俺だって命は惜しい、大人しく返すよ」

言うが早いか右手に握りこんだスマホを高く投げ上げる。チャンス到来。全員の視線が逸れた隙を突き、一番手前の若者の鳩尾を蹴り飛ばし、包囲網の綻びから転げだす。

悠馬が地面に突っ伏しスマホに飛び付くも、即座に表情が強張る。

「ふざけやがって、フェイクじゃねーか！」

「俺お得意のな」

こんな事もあるうかと用意してきたプリペイド携帯だ。中身は空っぽ。裏口は暗く、形状や大きさが似ていたからイけると踏んだ。

そろそろ潮時だ。

鉄パイプやゴム製の棍棒で武装した半グレの雪崩を躲し、ネオン瞬く表通りに飛び出す。

アスファルトを噛むタイヤの音が耳を劈き、目の前に滑り込んだ車の助手席が開く。

「乗ってください」

運転席に座った薫が笑顔で促す。助手席に飛び乗りドアを閉める。

「ナンバープレートは？」

「ご心配なく、すぐ換えてます」

「犯罪じゃねえか」

「今さらでしょ」

「だな」

アクセルを踏んで車を出す。半グレたちが吹っ飛ばされて転がり、バックミラーの彼方に遠ざかっていく。

「Gを感じる」

「シートベルトちゃんと締めてくださいね。収穫は？」

「ほらよ」

ダッシュボードに戦利品を投げ出す。ハンドルを握る薫がチラリと目をやり口角を上げる。

「中村悠馬のスマホ？ お手柄ですね」

「ヤベーもんが入ってる。あとで吸い出してくれ」

「了解しました。一言いいですか？」

「何」

「なんでベスト脱いじやったんですか？ 遊輔さんのボーイ姿楽しみにしてたのに」

「お前を喜ばせんのかから」

苦々しげに吐き捨てリクライニングシートを倒す。

「意地悪ですね」

薫は遊輔から預かっていたスマホを返却する。窓の外を行き交うひとびともまた、皆俯いてスマホをいじっていた。

「服、後ろですよ」

「！ ツで、腕擽った」

「運動不足ですね」

遊輔が苦勞して後部シートに手を伸ばし、背広とズボンとシャツを引っ掴む。薫がシニカルな横顔を見せて呟く。

「……盗聴器仕掛けてくるだけでよかったのになんで欲張っちゃうかな」

「ありや事故だ」

「せっかく従業員データのデータ引っ張ってきたのに。内通者が口割ったらどうするんですか？」

「大丈夫だよ偽名使ったし」

「防犯カメラにばっちり顔映っちゃってるじゃないですか。尻拭いする俺の身にもなってください」

「それなら問題ねえよ、連中の使用中はVIPルームのカメラ切つてある」

「え？」

虚を衝かれた薫に不敵な笑みを切り返す。

「違法ドラッグの取引現場が頭からケツまで映つてちゃやべーだろ？ 貸し切りで場所提供してる店も言い逃れできねえ」

「……なるほど」

「あの店はケルベロスがケツ持ちしてる。後ろ盾が損することたしねーよ」

「通路のカメラは？」

「死角を通りやごまかせる。事前に場所聞いてたし簡単簡単、仕上げに消火器ぶちまけた」
ダッシュボードに足をのせ、頭の後ろで手を組む遊輔を呆れ顔で見詰め、薫が苦笑いする。

「全く、逃げるのだけは上手ですな」

「だてに場数踏んでねえ」

「俺より十年余分に生きてますもんね」

「余分っていうな」

助手席でズボンを穿いて背広に袖を通す。その際ソフトパックのハイライトが零れ、ごく自然な手付きで一本抜いて唇に挟む。すかさず待ったがかかった。

「禁煙です」

「大目に見ろつて」

「俺の車なんで。匂いとか付くの嫌なんですよ」

さらに追い討ちをかけられ、だらけきって背凭れをずり落ちていく。

「ハードな取材やり遂げたんだけ？ ちよつとは労え」

「好きでやってるんですよ」

風祭遊輔と富樫薫の腐れ縁は一年前にはじまった。以来彼等はチームを組み、司法の裁きを逃れた権力者の犯罪を暴き続けている。

人呼んでバンダースナッチ。群にして個、個にして群の怪物。

「頼む、ニコチン補給しねーと禁断症状でるんだ」

「どんな？」

「貧乏揺すりとか手の震えとか。あとそうだと過呼吸」

「全然元氣そうですけど」

「ツぐ、はーっ苦しい！」

胸をかいてもがき苦しむ遊輔に対し、あくまで冷静に薫が説明する。

「でしたら心療内科でやってる禁煙プログラムおすすめますね、補助薬のニコチンパッチとバレニクリンには保険が適用されるようです。国民保険は入ってますか？ 支払い延滞したりは」

いらだちまぎれにダツシユボードを蹴り付ける。

「かわいくねーガキ」

「大人げない大人」

ふてくされる遊輔とは対照的に、彼を眺める薫の横顔には、ダメ男を甘やかしてもっとダメにする人たらしの

笑みが揺蕩っていた。

フレームインしたそばから夜闇に乗り後方に流れ去る雑踏が、儂い残像と化してテールランプに滲む。助手席の窓が映し出すのは落ち目のホストとインテリヤクザを足して割ったような、やさぐれた見た目の三十路男。

その肩越しにチラ付くのは、色男と優男のバランスが完璧にとれたイケメンだ。遊輔が皮肉っぽく独白する。

「タイトル付けんなら使用前・使用后だな」

「何のですか」

「……煙草？」

「やっぱ禁煙しましょうよ」

「できりやとつくにやってる」

自分はまだ手遅れなのだ、きつと。

富樫薫と風祭遊輔の腐れ縁が始まったのは一年前。

当時遊輔はニューハーフのママが営む新宿二丁目のバーに客として通っていた。

ある日新入りのバーテンダーとして紹介されたのが薫だった。

第一印象はすかしたイケメン。

清潔感あふれる風貌に柔和な微笑みとお仕着せのベストが調和し、モデルのように均整とれたスタイルが際立っていた。

この物腰柔らかな好青年が遊輔に睡眠薬入りカクテルを飲ませ、酔い潰れたのを幸いと縛り上げ、営業終了後のバーに監禁すると誰が予想し得ただろうか。

『ずっとあなたの記事を集めて、追いかけて、見てたんです。むかし書いた事件現場に通って、黙祷を捧げて、どンドンダメになって、でもやっぱり足を運んで、何かをじつと願うあなたを。電車の網棚に置き忘れられたリアルを駅のクズ籠に突っこんで、ずんずん歩いていく背中を』

富樫薫は風祭遊輔が書いた記事で救われた、数少ない人間の一人だった。

彼は遊輔の記名記事を残らずスクラップしてると言い、床に転がる遊輔の鼻先に跪き、危険な提案を持ちかけた。

今でも覚えている。

きつと一生忘れられない。

薫は綺麗な顔立ちをしていた。

中でも印象的なのは長く優雅な睫毛に縁取られた茶色の瞳で、淡い照明の下、色素の薄い虹彩がきらきら輝いていた。

この目どこかで見たことあるな、と遊輔は思った。

答えはすぐにでた。

遊輔を見詰める茶色の瞳には、カルト宗教の信者によく似た狂おしい情熱が宿っていたのだ。

『フェイクニュースの常習犯だろうと関係ない。あなたに譲れない真リアルがあるならどんな手を使っても証拠を掴んできます。使ってください』

コイツはヤバいと直感した。絶対イツちまつてると確信した。なのにさしのべられた手をとってしまったのは、あの頃の遊輔もまたどん底でもがいていたから。

記者を指した理由は単純。

遊輔は人一倍潔癖な正義感の持ち主で、世の中に罷り通る理不尽の数々が許せなかったのだ。

あらゆるハラスメントやいじめ、汚職に裏切り。

世間に蔓延る不正を暴いて世の中を変えたい、自分が書いた記事で変えていきたいと二十代の頃はがむしやらに頑張っていたものの、連日連夜張り込んで漸く掴んだ権力者の犯罪を上からの圧力で握り潰され、新人アイ

ドルが飲酒喫煙朝帰りしたただの野球選手がファンと不倫したただの、くだらないゴシップを書かされ続けるうちに減り燃え尽きた。

報われなかった。

自暴自棄になった。

酒に逃げた。

女に逃げた。

どんどん駄目になっていった。

自分でも駄目だとわかっていたが、もつと駄目になってくのを止められなかった。

たとえば自殺に追いやられたブラック企業の社員。

たとえば名門大の学生に暴行された女子大生。

遊輔は当事者やその家族一人一人と会い、直接話を聞き、「絶対記事にしてくださいね」と頼まれた。

結論から述べれば、約束は果たせなかった。

『特ダネもってこい。華のあるヤツな』

それが編集長の口癖だった。

新卒の若く可愛い女の子ならいざ知らず、SNSもしてないくたびれた中年男が本社ビルの屋上から飛んだ所で面白味がないとして過労死の記事はボツにされ、大学生グループの集団暴行の記事は、主犯の父親の与党議員が裏で手を回したせいで掲載が見送られた。

結果として週刊誌の巻頭を飾ったのは、大物芸能人同士の不倫の記事だった。

他にもある。

まだまだある。

たとえば幼児を虐待死させた未婚の母親の事。十代後半で父親がわからない子を産んだ彼女は、誰にも頼れず追い詰められた末、子供のアレルギーが原因のノイローゼを患った。

世間は彼女を鬼畜だのクソだの叩いた。

大前提として虐待の事実は正当化できないし擁護もできない。その一方重度の小麦粉アレルギーの子供の為に米粉クッキーを買いだめし、息子の一歳の誕生日には、アレルギーの子用のスマッシュケーキを近所のケーキ屋に注文していた。

自宅から押収された母子手帳には、イラスト入りの成長記録が詳細に綴られていた。

『たんじょうびおめでとひーくん 体重増えたね がんばったね 来年はママが手作りするね』

来年は来なかった。

デスクは遊輔が抜粋した母子手帳の記述に難色を示し、母親が高校時代にパパ活していた男や、中一の頃から性的虐待を加えていた養父へのインタビューに差し替えるように指示した。

『あのな風祭、読者は虐待親の胸糞な所業と壮絶な過去を知りたがってたんだ。興ざめなお涙頂戴エピソードはいらねえよ』

『産婦人科で聞いてきたんです、定期健診にや毎回来ってたって……細かい字でびつしり書いてたんすよ、アレギーのことも』

『母子手帳に初めてハイハイした日や歩いた日の事書いてたからなんだってんだ。それで虐待の事実がチャラになんのか、子殺しが許されんのか？ いいか、読者は思いくそ犯人をぶつ叩きてえんだよ。実のガキ鬮り殺した母親がどんだけクソだったか知りたくて雑誌買うのに、育児と生活苦のストレスで泣く泣く手を上げちまつたんですよとかヌルい雑音は余計だろ』

『これだつて事実ですよ』

パワハラ自殺したサラリーマンの遺族に謝りに行った。妻は泣いていた。小学生の息子は誰も信じない目をしてた。レイプ被害の実態を話してくれた女子大生に謝りに行った。最初に取材に応じてくれた子は摂食障害が悪化し、精神病院に入ってしまった。子供が虐待死したアパートに行った。有名メーカーのビスケットがおいであつた。死んだ子は米粉でこしらえた、一口サイズの動物クッキーが好きだった。小麦粉アレルギーで食べられない物があつたのだ。

遊輔が書いた記事が世に出ていたら、事件現場のアパートには米粉クッキーが手向けられていたかもしれない。

二日酔いで痛む頭を抱え、締め切りが翌日に迫った穴埋め記事を捻りだしながら、こんなのが俺のやりたかった事かよと自嘲した。ふとスマホを見れば「Twiceのトレンドに「墨田区虐待死」「パパ活女」「養父」「性的虐待」が上がり、あの母親が叩かれていた。匿名掲示板では死んだ子の父親が養父じゃないかと憶測が飛び交っていた。時々会って金をもらっていたのが証拠だと、名無しの連中が書き込んでいる。

母子手帳の件はスルーされた。遊輔を含めた一部のマスコミ関係者しか知らないのだから当たり前だ。

故意に真実を歪めたんじゃないやねえ、取捨選択しただけ。きっとクスはクズのままでいてくれた方が都合が良いのだ。実はクスじゃない所もありましたなんて後出しされても死んだ子は生き返らねえし、中途半端に同情なんてしちまつたら気持ちよく叩けなくなるじゃないやねえか。

遊輔は悟った。

世間が求めているのはもつともらしさリアリティであつて、真実リアルじゃねえ。

以上のような紆余曲折を経、富樫薫と風祭遊輔はバディ結成に至り、暴露系ニュースチャンネル『バンダースナッチ』を開設した。

間接照明がムーディーに演出するカウンターにて、バーテンダーの制服に着替えた薫がギャル二人組を接待する。

「口コミ読んでずっと来てみたかったの」

「若くてイケメンの店員さんがいるってホントだったんだく足のばした甲斐あったね」

「ありがとうございます。普段はどこで飲んでるんですか」

「渋谷かな」

「柑橘系の甘口カクテルが好きなの、ジュースみたいに飲めるでしょ。ほらアレなんてつつけ、カオス……」

「カシスオレンジ?」

「ソーソー」

「じゃあフアジーネーブルはいかがでしょう? カクテルというよりフレッシュジュースみたいに飲み口爽やかでイケますよ、色も綺麗で女の子人気高いし。ピーチリキュールとオレンジジュースがベースでアルコール度数は5パーセントです」

「わくおいしそくそれにする!」

「私はクリーミーなのがいいな〜」

「でしたらモーツアルトミルクをおすすめします、チョコリキュールと牛乳を混ぜて作るチョコ味のカクテルでアルコール度数は8パーセント以下」

「モーツアルトって音楽室の肖像の？」

「変な名前」

「モーツアルトの生まれ故郷のオーストリア・ザルツブルクで製造されたそうです。他にもモーツアルトアイスクリームやモーツアルトミルクシエークなんかがありますよ、飲んでみますか」

「飲む飲む！」

頬を染め感嘆符を連発する女の子たちに対し、薫が「かしこまりました」と甘い笑顔を向ける。

それを観察していたママがきっぱり断言する。

「薫くんは天然たらしね。あの子を採用してから女の子のお客さんが急増したわ、みんなレビューにホイホイ釣られてくるのよ。女子ってほら、メンクイでミーハーでしょ？ まだ若いのに知識が豊富で腕も確か、拾い物だわ」

「そのレビューママが仕込んだサクラじゃねえの」

「失礼ねエ、ガチでマジな評価よ」

ドヤ顔で得意がるママをよそに、遊輔はカウンターの端でウイスキーの水割りを飲んでいた。記者になりたての頃から通つてるせいかお互い気心知れており、遠慮なく軽口交わせる間柄だ。女の子たちにカクテルを出して戻ってきた薫が、あきれ顔で遊輔を見下ろす。

「飲みすぎじゃないですか。少しは自制してください」

「るっせ」

「店のツケで飲むお酒はおいしいですか」

「酒は酒、それ以上でも以下でもねえ。要は酔えりやいんだよ」

「本ッ当真どうしようもない男ねエ、結婚できないわけだわ。聞いた薫くん、遊輔ちゃんが大学の時付き合ってた元カノの話」

「いえ。なんかあったんですか」

ママが薫に耳打ちするのを遮り、まだ中身が入ったグラスの底をカウンターに叩き付ける。その後無言で背広の懷から一通のハガキを取り出し、滑らす。

ハガキを手にとった薫が無表情にコメントする。

「拝啓お日柄も良く云々……風祭遊輔様宛の結婚式の招待状ですね」

「そうだよ」

「元カノが結婚するからヤケ酒飲んでるんですか？ うわあ」

「『うわあ』とかいうな」

「実際引くわよ、三十路で独身の男が何年も前に別れた元カノの事引きずってるなんて。そんなにいい女だったの？」

辛辣なツツコミに渋面を作り、ぬるくなった酒をちびちびなめる。

「別に将来考えてたとかじゃねエけど、今でもたまに会ってラブホ行く仲」

「ちよっと待って、付き合ってたのって大学の時ですよね」

「そうだけど」

「別れた原因は」

「俺の浮気とギャンブル癖。麻雀で負け込んだのがまずかった」

「お金借りたりしてないですよね」

遊輔が右手の五本指を立てる。しめて五万円。

「最低じゃないですか」

薫とママの顔に軽蔑が浮かぶ。遊輔がむきになり反論する。

「あつちも浮気してたぜ、お互い様じゃん」

「それから何年もずるずると……」

「都合よい女が都合よい男と都合よいセックスしてたんすね」

眉をひそめるママの隣で磨いたグラスを照明に翳し、退屈げに薫が呟く。

「本当に彼女だったんですか。セフレじゃないんですか」

「ちゃんと付き合ってたって」

「デートはどこに？」

「サイゼリヤ」

「出た、彼女をサイゼリヤに連れてく男」

「叙々苑にも行つたって俺のおごりで。金欠の時はおごつてもらつたけど」

「遊輔さんが金欠じゃない時つてあるんですか？ やっぱりセフレですよそれ」

「この際セフレかどうかはどうでもいい」

「どうでもよくはないですよ」

「相変わらず倫理観死んでるわね、そんなんだからマスゴミ呼ばわりされちゃうのよ」

太いため息を吐いて去つていくママを見送り、鮮やかな手付きでシエイカーを振りだす。遊輔がしゃつくりをあげる。

「元同級生がごんごん身イ固めておいてかれる気持ちわかるか？ 頼んでもねーのに子供の写真プリントした年賀はがき送り付けられんだぞ」

「年賀状くれる友達いたんですね」

「二・三枚は来る」

「在庫を処分したかったんでしょね。結婚式は行くんですか」

向こうに座った女の子たちがカクテルを飲むのも忘れ、シエイカーを攪拌する薫に見とれる。何をやっても嫌味な位絵になるヤツだ。

「披露宴は高級ホテルのホール貸し切り。一食浮くのは魅力だな」

「結構シヨック受けてます？」

いまさらすぎる質問に苦笑してグラスに口付け、からなのに舌打ちをもらす。

遊輔には結婚願望がない。

恋人と家庭を持ちたいなどと終ぞ思った事はないし、好きな時に好きな女と遊べる生活を楽しんでいるが、三十をこえた頃から将来に対し漠然とした不安が付き纏うようになったのは否定できない。

「アイツ、でき婚だとき」

肩口でシエイカーを構えた手が一瞬止まり、スムーズに再開される。

「心当たりは」

「ゴムしてたつての」

「外に出すのを避妊と勘違いしてる人種じゃなくて安心しました」

「人の親になるようなガラじゃねーしなれるとも思わねー」

「お父さんやってる遊輔さん、意外と似合いそうですね」

「気持ち悪いこと言うな」

「ああそっか、このさき一生誰とも結婚せず一人で生きて死んでくこと考えてセンチメンタルになっちゃったんですね。孤独死の相が浮かんでますもんね」

嫌なヤツ。

「見透かすんじゃないよ。てか孤独死の相ってなんだ」

「その顔ですよ。ちゃんと寝てますか、また隈が濃くなってる」

「ほっとけ、目付きの悪さは生まれ付きだ」

腕枕の上に顎を置いて唸る。

遊輔は無造作にはねた黒髪と自堕落なスーツの着崩しが様になる塩顔の色男で、水商売の女にモテた。「落ち目のホストとインテリヤクザを足して割ったような見た目」と評したのはママだったか薫だったか、悔しいがその通りだ。

仏頂面で睨みを利かす遊輔に「凶星か」とひとりごち、シェイカーを傾けて新しいグラスに中身を注ぎ、店の名前が印刷されたコースターを敷いて出す。すかさず指摘する。

「頼んでねえぞ」

「労えて言ったでしょ。おごりです」

薫が微笑んで促し、遊輔は澱んだカウンターを見下ろす。ライムの輪切りをグラスの縁に挟んだ、鮮やかなオレンジ色のカクテルだ。

「ノンアルかよ」

憎まれ口を叩いてストローを回す遊輔に、博識なバーテンが蘊蓄をたれる。

「シャーリー・テンプルはアメリカの人気子役にちなんだカクテルです。結婚後の名前にちなんだ、シャーリー・テンプル・ブラックのバリエーションも存在します」

「ウオツカをたらしやダーティー・シャーリーになる」

大人の欲望で汚された少女たちに。

薫が言いたい事がわかった。遊輔はグラスを掴んで掲げ、一気に干す。青年がカウンターに身を乗り出し、耳元で低く囁く。

「勅使河原聖改め勅使河原誠の俳優生命はおしまいです。警察には匿名でタレこんでおきましたんで、近々本格的に捜査が始まるでしょうね。彼と仲良しの警視庁のお偉いさんも逃げられない」

富樫薫の本業はハッカーだ。それも凄腕の。遊輔はスマホを見、匿名掲示板のスレッドやSNSの反応をあらためていく。

『バンダースナッチ』の動画を視聴した連中は悪口雑言を尽くし、勅使河原聖を袋叩きにしていた。

「遊輔さんが頑張つて張り込んでくれたからいい画が撮れました。百聞は一見にしかずですね」

「お前の手柄だろ」

「俺たちの手柄ですよ」

律儀な訂正に鼻白む。眼鏡のレンズに液晶の青白い光が反射し、横顔を翳らす。

「余罪がたんまりあったんで続々証拠が上がってますね。被害者の子も数人名乗り出だし、しばらく祭りが続きそうです」

ただのパパ活ならほうつておいた。ほうつておけなくなったのは勅使河原が中学生に手を出し、東南アジアの

貧しい少女たちを買っている事実を掴んだから。
彼女たちは親に売られたのだ。

神妙に黙り込む遊輔に何を思ったか、薫が軽い調子で提案する。

「次は遊輔さんも一緒に撮りませんか、黒猫の被り物用意したんですよ」

「やだよ痛い」

「そんなズバツと……」

「顔隠すだけなら紙袋でもプラのお面でもいいのに、出っ歯うさぎのきぐるみとかどーゆーセンスだよ」

「『バンダースナッチ』は『鏡の国のアリス』に登場する怪物じゃないですか。読んだことは？」

「忘れちゃったね」

知ってしまった以上知らんぷりできない。だからこそ勅使河原の本性を暴き、世間に広く知らしめた。勅使河原は芸能界に居場所を失い、警察に逮捕され、家庭も崩壊する。

「世界中のシャーリー・テンプルたちに乾杯」

「……乾杯」

薫が二杯目のカクテルを作り、遊輔のグラスとかち合わせる。涼しげに澄んだ音が鳴り、氷山の一角が沈む。

「じゃあ薫くん、酔っ払いの後始末よろしくね」

「了解しました」

二時間後、看板のネオンが消える。

「よつと」

ドアに掛かった看板を『closed』に裏返し、流行歌を口ずさんで退勤するママを見送ったのち、片手にバケツ、片手にモップを下げて店内を見回す。

「眼鏡したまま寝オチですか。こりない人だな」

『バンダースナッチ』の作戦会議は大抵の場合、営業時間終了後の『Lewis』で行われる。とはいえ肝心の相棒が酔い潰れ、高軒をかいてたんじゃどうしようもない。

「薰くおかわりく」

「今日の営業は終了しました」

「ケチ」

空のグラスを掴んでねだる遊輔を放置し、床をモップで擦る。

カウンターに面したスツールを一行に揃え、等間隔に並ぶテーブルを綺麗に拭き清め、英語のラベルが貼られた酒瓶を棚に戻す。

薰は遊輔とふたりきりになれるこの時間が一日の中で一番好きだ。

ときばき雑用をこなしながら時折ちらりとカウンターに目をやり、彼がそこにいる事を確認し頬を緩める。

清掃終了と同時にブリキのバケツにモップを突っ込み、遊輔の隣のスツールに腰掛ける。

「ご苦労さん」

「お話してくださいよ」

「何を」

「何でもいいです」

貴方が感じた事、考えてる事ならなんでも。

カウンターに片頬付けた遊輔が、鼻梁にずれた眼鏡越しに虚ろな視線を投げてくる。

「昔々、もう何年も前の話」

「はい」

「テレビを見てたらニュースが流れた。無職の男が同居中の親父を殴り殺したんだ。親父は七十代で男は三代。息子の名前は登る夢と書いて登夢^{とむ}。父親に働けって言われてキレた、それが動機」

「DQNネームですね」

そんな名前を付ける毒親だから、殴り殺されても当たり前だというのだろうか。

しかし遊輔の見解は違った。

「夢に登るって書くんだぜ。生まれてきたガキの幸せ願って付けたって、字を見りゃわかかんじゃん」
殺された父親が付けたかどうかはわからない。真実はきつと永遠にわからない。

「―で、思ったわけ。この名前を付けた時、出生届に書き込んで区役所に提出する時、この爺さんは大人になった息子に殴り殺される日が来るなんて絶対考えちゃいなかったんだろうなって」

「……………」

「同じこと考えたヤツ何人いのかな」

遊輔さんだけかもしれないませんがと告げる代わりに、限りなく優しい声で囁く。

「名前負けしちゃったんですね、その人は」

「嫌なら変えりゃよかったんだ」

実にささいなこと。

取るに足らないこと。

なのに忘れられない。

「だからせめて、俺だけは覚えようと思った」

覚えていたところでどうにもならない。

手遅れだとわかつている。

「俺はいい名前だと思った。そんだけ」

そういうことを書いて、届ける人間になりたかった。

取るに足らないとして見過ごされてきた事件の端っこを、本当は核に近い所にあるかもしれない心の取りこぼしを、自分が書いて届ける事で救われる人間が、この広い世界のどこかにきつというはずだと信じていた。

あの頃はまだ。

遊輔の話聞き終えた薫は、さりげなく片手を翳し彼の髪をなでる。

「遊輔さんの名前の由来は」

「ババ抜き」

「はい？」

「お袋がお水でさ。候補が何人かいたもんで、常連の名刺コレクションから選ばせたんだよ。赤ん坊の俺がたまたま掴んだのが裕輔。さすがに一字変えたけど」

「作り話でしょ」

否定も肯定もせずふてぶてしく笑い、間延びした寝息を立て始める。薫が入れ違いに腰を浮かす。

「風邪ひきますよ」

「ん……」

軽く肩を揺するも遊輔は目覚めない。眉間にぐずるような皺が寄り、眼鏡がさらにずり落ちる。

唇は乾いて荒れていた。噛み癖があるせいで少し切れてる。親指をかけて少しめくり、ふくらみを辿る。店には誰もいない。

肩を掴んだ手を剥がし、磨き上げたカウンターに突き、無防備すぎる寝顔を間近で覗き込む。

こめかみに唇を寄せ、啄む。次いで頬に移す。遊輔がくすぐったげにもぞ付き、スツールが小さく軋む。まだ大丈夫。

ゆつくりと上にかぶさり、注意深く肩を押し、薄く開いた唇に唇を触れ合わせる。

熟柿の匂いがする吐息を飲み干す。

酒と煙草の味。

しどけなく仰け反る首筋と尖った喉仏が、はだけた襟元から覗くシャープな鎖骨が、仄かに上気してしっとり汗ばんだ肌が理性を散らす。

誘惑に抗えず、引き締まった首筋に手を添える。

少し速い脈と体温を感じた。

さらに大胆に両手を回し、無抵抗な遊輔の頸動脈を押さえ、前屈みに尋ねる。

「遊輔さんは、好きな人に首絞められたことがありますか」

もうすこし力を込めれば窒息し、あっけなく死ぬ。この人を殺し、俺の物にすることができると。

「……ッ」

体がどうしようもなく火照って疼く。今日は自ら運転し遊輔を迎えに行ったから、なおさら高揚を抑えがたい。吐息を荒げ、興奮に慄き、スツールから滑り下りて跪く。

この人がほしい。しゃぶりたい。めちやくちやにしたい。仕事中はずっと我慢していた、カクテルを作り接客しながら彼に奉仕し抱き潰す想像に耽っていた。

痺れを切らして下半身に縋り付き、性急にベルトを緩めズボンを脱がしにかかる。

「ごめんなさい。ちよつとだけ」

ご褒美をください。

見返りをください。

あなたは何もしなくていい、ただ寝ていてくれればいい、そうしたら最高に気持ちよくしてあげます。

「んん……」

遊輔が眉間に川の字を刻んで身動ぐ。股間に顔を突っ込んでいざフェラチオを始める寸前、頭に手が置かれた。反射的に視線を上げ、驚愕に目を見開く。スツールにもういない男が腰掛けていた。

フラツシユバック。

遊輔が薫の頭を押さえ込み、手の甲でじゃれるように首筋をなぞった瞬間、忌まわしい記憶が呼び起こされた。罪悪感と羞恥心に塗れたまま遊輔を支え外に連れ出し、愛車の助手席に押し込む。

「駅まで送ります」

「終電出ちまつたよ」

「じゃあアパートに」

「追ん出された。家賃滞納で一週間前に」

「は？ 今までどうしてたんですか」

「ネカフェの個室や女の部屋に転がり込んで……」

最後まで聞かずドアを叩き閉め、シートベルトを掛けてエンジンをふかす。仕方ない。バックミラーの向きと位置を微調整し、体重かけてアクセルを踏み込む。

「十分で着きます。俺のマンションに泊まってください」

バックミラーに映った遊輔が片目だけ開け、呟く。

「大麻とか栽培してる?」

「人聞き悪い」

「風呂でワニ飼ってる?」

「コインロッカーベイビーズじゃあるまいし」

「俺の肉は筋張ってて美味くねえぞ」

それ以上戯言には付き合わず、スマホのポリュームを最大に上げて音楽をかける。以前遊輔に教えてもらった七十年代のブリティッシュロックだ。結構ハマっている。

遊輔が寝ぼけたまま革靴の爪先で拍子をとっていた。薫も調子を合わせ鼻歌を口ずさむ。

十分後に薫は帰宅した。現在彼が住んでいるのは世田谷の一等地にたたずむタワーマンシヨンの二十二階。エントランスのスロープを下り駐車場に車を止めたのち、エレベーターで部屋に赴く。

鍵をさしこんで回すと真つ暗な廊下が出迎えた。遊輔を抱き直して引きずり、リビングのソファアに寝かせる。「毛布持つてきますね」

既に熟睡しており返事はない。肩を竦めて一旦離れ、また気が変わり戻ってくる。

遊輔の顔に手を伸ばし、慎重に眼鏡を外し、弦をきちんと畳んでテーブルに置く。

もともと若作りな方だが、ぼらけた前髪が垂れかかる素顔は目元の険が和らいであとけないとさえいえだ。足早にリビングを横切り、廊下を通って突き当たりのドアを開ける。そこが薫の私室だ。

ベッドに敷いた毛布を取ったのち、四面の壁を埋め尽くす夥しい写真を振り仰ぐ。

「さすがに見せられないな」

薫の部屋には盗撮した遊輔の写真が貼られていた。

ファミレスのテーブル席で原稿を書く遊輔、雑居ビルの入口で誰かを出待ちする遊輔、けばい女とラブホに入っていく遊輔、駅のホームで電車を待つてる遊輔、コンビニで週刊誌を立ち読みする遊輔、終電の車内で大股開いて爆睡する遊輔、パチンコ台で銀玉を弾く遊輔、競馬場で鼻唄の馬を応援する遊輔。

防犯カメラの映像を引き伸ばしたピンボケ写真や、高校の卒業アルバムを個人写真まであった。

今を遡ること十四年前、高校時代の遊輔はゼロタイプでフレームを補修した眼鏡をかけ、腫れた頬と切れた唇の端に絆創膏を貼り、ブレザーの制服をノーネクタイで着崩している。

毛布を持ったまま正面の壁に歩み寄り、啞え煙草で歩く遊輔の写真を恍惚と潤んだ瞳で見詰め、この上なく愛おしげに触れる。

「やっぱり。三年前から変わってないや、眼鏡」

雀の囀りと共に窓から差し込む陽射しを浴び、まず最初にしたのはだらしないと評判の下半身の確認。

「セーフ、穿いてる。つてこたあ女の部屋じゃねえな」

さすが俺、名推理。

二日酔いで痛む頭を押さえ、体を起こした拍子に毛布がずり落ち、床に敷かれたカーペットの上に落ちる。

「眼鏡眼鏡」

小声で呟いてテーブルを手探りした直後、顔面に冷たい飛沫が降り注いだ。

「うわっ!」

不意打ちにたじろぎ、うるさい音をたて転がり落ちる。

床に大の字に伸びた遊輔をぼやけた人影が覗き込む。眉間に皺を刻み、逆さまの顔に目をこらす。

「何してるんですか」

「一人コント」

「前衛的なラジオ体操かと思いました」

「このかっこでいると頭に血が下りて思考が活性化するんだ、豆知識な」

「探し物はこれかな」

もったいぶった含み笑いに次いで押しつぶさり、顔に眼鏡をかけ離れていく人影を睨む。

「おはようございます。爽やかな朝ですね」

カジュアルな私服姿の薫がにつこり微笑み、遊輔がこの上ない洗面を作る。

「なんで霧吹き置いたの? ビデオラップ?」

「顔洗うてま省けたでしょ」

霧吹きスプレーをとり、ソファアのすぐ横の観葉植物に湿りを与える薫。

上機嫌で口ずさんでいるのは遊輔がこないだ貸したブリティシユロツクの名曲だ。

「野郎の部屋で目覚めるなんて最悪の気分だよくそつたれ、しかも寝違えた」

「寒空の下に放置しなかっただけ感謝してください」

あくらをかいてあくびを連発、寝ぐせの付いた髪をだるそうにかきむしる。

だんだん記憶が甦ってきた。昨日はバーで酔い潰れ、薫に車で送ってもらったのだ。

広く快適なりビングを見回し、端的な感想を述べる。

「大麻がねえ。ワニもいねえ。ツマンねえ」

若い男の一人暮らしということを踏まえれば贅沢極まりない設備と面積。オールドアメリカ風のインテリアで統一された室内は、モデルルームのように見栄えがよい。観葉植物は瑞々しく、ソファアやカーペットも値が張りそうだ。

「ご期待に添えずいません」

霧吹きを置いて立ち去る薫を追い、覚束ない足取りでキツチンへ行く。

チェーンソーを回すようなけたたましい電動音にびくりとする。

薫がミキサ―に似た装置を傾け、手に持ったコップの中にペースト状の何かを注いでた。

「藻？ 青汁？」

「青野菜の特製スムージーです。二日酔いによく効きますよ、一気にどうぞ」

「それミキサ―？ すごい音してたぞ」

「サイレンサーが付いてればよかつたんですけどね」

「暗殺道具かよ」

「仕留めにいきませぬ」

振り返りざま銃を模した指で撃たれ、もたらなかつた食欲が急激に失せていく。仕方なくコップを受け取り、もとい押し付けられたものの、どうしても口を付ける気にならない。

微妙な顔で立ち尽くす遊輔に、薫が朗らかに勧める。

「ハチミツ入ってるから甘いですよ。ぐいっといつてください」

「あくうん……コーヒーくんね？ ブラックで」

「朝いちでカフェインは胃に悪いですよ」

うるせえよ馬鹿。罵りたくなるのを辛うじてこらえ、好青年にスムーズを突っ返す。

リビングに戻るやいなや両手を広げてソファーに身を投げ出す。仰け反り見上げた天井では、四枚羽の木製ファンが旋回していた。

「あんまり覚えてねえんだが、またこっばずかしいこと言ってた？」

「昨日は」

「いや待て言わなくていい、忘れろ」

泥酔すると青臭いことをたれながすのが遊輔の悪い癖だ。眼鏡ごと顔を覆い、しばらく自己嫌悪に沈む。

薫はストローでスムーズをかきまぜている。

「遊輔さんの名前って名刺ババ抜きで決まったんですか」

「怖。なんで知ってるの」

顔から両手を下ろし驚く。薫は慈悲深い微笑みではぐらかし、猫のような足取りでソファーの後ろに回り込む。

キッチンカウンターのサイフォンが黒い液体を蒸留する。

「コーヒー淹れますよ」

「サンキュ」

「その前にスムージーで胃をコーティングしてくださいね」

「保護膜は牛乳でやるもんだろ」

両手を組んでもいきり伸びをする。そういやコイツの部屋に来るの初めてだなと気付き、リビングを歩き回って花瓶や置物をひねくり回す。質に入れたら良い儲けになりそうだ。

「中村悠馬と半グレの件は次やりましょ」

「一応録音したけど、今聞き直したら結構雑音が入っちゃってるな」

「パソコンでノイズキャンセリングしますよ。証拠音声あるのとないのとじゃ食い付きが段違いですから、体張った甲斐ありましたね」

遊輔がボーイになりすまし接触した中村悠馬は都内の名門大に在籍する議員の長男で、ドラッグを用いた婦女暴行の常習犯だった。

遊輔が一年前にスクープをすっぱぬき、デスクに握り潰された事件の主犯でもある。

あの時遊輔の記事が世に出ていれば、被害者は二桁に突入しなかったはずだ。

「ずっと追っかけてた因縁の相手なんですよ？ リベンジできてよかったじゃないですか」

「お前がお膳立てしてくれたからな」

煮え切らない返事をし、砂時計を逆さに置き直す。ガラスの曲面に歪んだ顔が映り込み、憂鬱な気分には拍車がかかる。

遊輔一人じゃ中村悠馬を追い込むのは不可能だった。凄腕ハツカーの薫が動いたからこそ、確かな犯罪の証拠を掴むことができたのだ。

薫が腕を組んで壁にもたれる。

「中村が詰んだこと、取材した子たちに教えてあげないんですか」

「そんな資格ねえよ」

「でも」

「蒸し返されたがってねえ子もいる」

当時インタビューした被害者の大半と連絡をとってない。先方がそれを望まなかったのだ。

薫が付け足す。

「被害者のプライバシーには細心の注意を払いますよ」

「炎上すりゃよつてたかつて暴かれる」

「そうですよ？」

薫が場違いに笑い、いつそ無防備なまでに大胆に遊輔に歩み寄る。

色素の薄い瞳が瞬き、遊輔の困惑顔を映す。

「最初に会った時言ったじゃないですか、一緒に地獄に落ちてくれる覚悟はあるかって」

「俺と心中してえとか悪趣味だな、そんな熱烈なプロポーズ女にもされたことねえよ」

「知ってました」

薫が満足げに頷いてさしだすコップを片手を立て押し返す。高速で三往復した末、一口飲んだ薫が緑に染まった舌をたらず。

「ベロしまえ。引っこ抜きたくなる」

「むしろ抜かれるほうじゃないですか閻魔様に」

「火炎地獄でタン塩パーティーとかぞつとしねえな」

「俺はタレ派ですね、レモンを一滴絞るとイケます。今度焼肉いきませんか？」

「おごりか？」

遊輔が念を押す。

「おごりなのか？」

薫はスルーする。

「中村のスマホ手に入ったのはラッキーでした。中身は？ まだ見てないんですか」

「ぜってえ胸糞悪イもん入ってるし」

本当なら昨日の段階であらためるべきだったが、どうしても決心が付かずするする引き延ばした。薫が横から手を伸ばしスマホを掠めとる。

「貸してください」

「おいこら」

「ああなるほど……予想当たってますね、なかなかエグい。ファイルは十二個、全部で十二人分か」

薫がポリウムを上げる。男たちの笑い声と女の喘ぎ声が高まり、遊輔がうんざりする。

「返せ」

すぐにポリウムを下げ音を消し、動画ファイルのダウンロード履歴を調べていく。本音を言えばすぐにでも削除したいが、警察に送信をすませるまで我慢しなければ。ふとVIPルームで交わされた会話を思い出し、液晶においた親指を止める。

「どうかしました？」

「中村がアホなことぬかしてたんだ、本物のスナッフフィルム手に入れたとか……虚言症の坊やのフカシだと思つて、そんな時や流しちまったんだが」

「中国の違法動画でも引つ張つてきたんですかね。あつちは無法地帯だから」

「メイドインジャパンらしいぜ、男が変態に嬲り殺されてる動画つて話だ」

「本気にしてませんね」

軽薄に肩を竦める。

「スナッフフィルムは都市伝説。長年記者やつてるけど、本物にや終ぞお目にかかったことねえな」

「事實は小説より奇なり、決め付けは早計ですよ」

「ダークウェブに潜つてんだろ？ そつちにや転がつてんのかよ」

「本物っぽいのはめつたにお目にかかりませんね。作り物なら腐るほど」

「どこもかしこもフェイクだらけだ」

自嘲気味に笑つて履歴をスクロールし、止まる。

二日前にダウンロードされた動画の中に、『フェアリー・フェラーの神業 其』と題されたファイルが紛れていた。

どちらからともなく顔を見合わせクリック、動画を再生する。親指を動かしポリウムを上げる。映し出されたのはどこかの部屋……地下室だろうか。

壁に妙な絵が掛かっている。草むらに撒かれた木の実と犇めく妖精の群れ。

カメラの照準が絞られ、ベッドの端に並べられた道具を一個一個ズームで撮っていく。

ペンチ。金槌。万力。アイスピック。注射器。脱脂綿。輸液袋。最後に映ったのは鉄製の洋梨。

『……クっソ悪趣味なお医者さんごっこやな。イカレとんでアンタ』
『知ってる』

音がする。ベッドが軋む。悲鳴が響く。遊輔の顔が強張り、スマホを掴む手がじつとり汗ばむ。薫が真顔で感心する。

「実在したんですね」

限界だった。

「おえ」

薫にスマホを投げ渡すなり床に突っ伏し、盛大にえずく。

トイレはどこだ？ くそ、はじめて来たからわかんねえ。口元を押さえ廊下を這い進むうち、突き当たりのドアの存在に気付く。あそこか？ 直感に従って駆け出す間際、背広の裾を掴んで制された。

「洗面所はこっち」

バスルームに入り、洗面台に顔を突っ込んで酸っぱい胃液を吐く。蛇口をひねる。しぶきがとぶ。

薫が遊輔に付き添い、前屈みになった背中を優しくさすってやる。

「記者のくせに情けないなあ、事件現場の取材で免疫付いてるんじゃないんですか」

「ここ何年かは芸能人のケツ追っかけ、うぶ、てたからッ、久々にドギツイの来たわ」

蛇口の下に頭をさしのべ、勢いよく進る水を浴びる。薫が間延びした声で嘆く。

「あくあ、眼鏡かけたまま洗っちゃった」

「言ってる場合かよ、なんだありゃ」

「だからスナッチフィルムでしょ、本物の。映ってるのは誰でしょうか。まだ若い……俺と同じ位の男の子です」

次いでにうがいをし苦い後味をすすぐ。

グロッキーな遊輔の隣で小気味良く画面をタップし、早送りと巻き戻し、一時停止と再生を小刻みに繰り返しながら薫が呟く。

「で、どうします？ 警察に送ってさっさと忘れませんか」

洗面所に壮絶な断末魔が響き渡る。青年が母親を呼ぶ声が聞こえる。遊輔は大急ぎで考えをまとめる。彼も記者の端くれだ、この動画がCG合成した偽物か本物かは見ればわかる。

問題は出所と流通経路。

仮にこの動画が本物の殺人現場を撮ったもので、青年を颯り殺した犯人が野放しなら

「……警察には送る。匿名で」

「そのあとは」

わかりきった答えを促す薫の澄まし顔にスマホを突き付ける。

「コイツがどこの誰か調べる」

既に見たものを見なかったことになって忘れてしまえるほど、遊輔は器用にできてない。

警察にまかせておくと右耳で理性が囁く。お前はそれでいいのかと左耳でプライドが囁く。よくはない。断じて。

何故なら動画の青年はこちらに手を伸ばし、繰り返し助けを求めているから。

「バンダースナッチも犯人を追うぞ、薫」

バンダースナッチは鏡の国のアリスに登場する群にして個、個にして群の怪物。

その姿形や性質は不明で、作中の詩だけが存在に言及する。

一説によると非常に素早く、燻り狂ったバンダースナッチに近寄るのは禁忌とされていた。

「最後までお袋呼びながら死んでったガキを、名なしのままにしておけるかよ」

犠牲者の最期の瞬間で動画を止め、軋むほどスマホを握り締める。

「二日酔いでただでさえ最低の気分をどん底の底まで落としやがって、きっちりツケ払わせてやっからな変態

野郎

この世には怪物が存在する。

たとえばフェアリーフェラー。たとえばバンダースナッチ。(以下続)